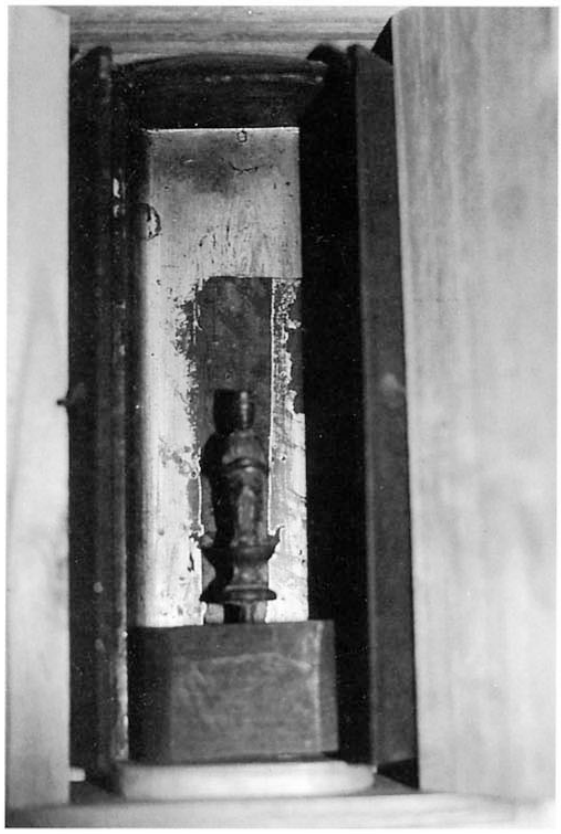
1　有形文化財

阿弥陀如来像

【所在地】　富田（八幡神社別当）

享保18年（1733)、不動院永慶によって書かれた「阿弥陀如来縁起」によれば、その昔、最上川絹縫の滝におびただしく光るものがあり、村人は不思議に思った。丁度その頃、信夫某という旅人がこの地を訪れ、「この辺に阿弥陀如来の古仏がありますか。」と尋ねた。その人の云うには、この仏は往古の奥州信夫郡の領主佐藤庄司元治代々の持仏であったが、彼が文治年中（1185～1189）奥州藤原泰衡と戦って破れ出て、丸山城を逃れ出て、羽州慈恩寺、羽黒山に赴く際に、如来をこの辺に安置したと確かに聞いているので、今ここに尋ねて来たという。それで、村人達は水面がおびただしく光るのは如来のせいであろうと、波が光る所へ舟を漕ぎ寄せ、水底にもぐり、阿弥陀如来を拾い上げ、そこに草堂を建てて祀った。後、お堂を堀内に遷座、さらに、その後轟楯に移した。時を経て、猿羽根氏が猿羽根城を築いた折、仏を、猿羽根家祈願所として建てた猿中山西光寺に移した。これがこの仏の縁起の大略である。西光寺跡は現在寺屋敷と伝えられる所であろうが、阿弥陀如来と伝えられる祕佛は義高家に安置されている。尊像は、鋳金と思われる尊像（高さ約７㎝）で、台座（約2.5㎝）に立っているお姿である。同仏を納めた厨子は漆塗りの観音開きで幅約14㎝、高さ約31㎝、厨子背部に金箔を施してある。更に白木の桐の観音開きの箱に納めてある。



平成５年11月27日撮影

八幡神社左手にある阿弥陀堂　　平成７年８月９日撮影

松橋薬師瑠璃光如来座像（ルリコウニョライ）

舟形町指定文化財（昭和50年４月１日指定）

【所在地】　松橋薬師堂

薬師堂は松橋集落を見下す山の中腹にまつられている。本尊の薬師如来座像は木像で、高さ３尺７寸（約121㎝）。識者によれば、平安後期藤原時代の作と言われ、最上郡内で最も古い仏像の一つである。幾度か火災に遭（ア）って膝の部分は焼けているが、顔姿は時代の古さを感じさせる優品である。「薬師如来の由緒（ユイショ）」によれば、大同元年（806）、葉山大円院医王法印が隠居（インキョ）した折、葉山々頂から移して字ユカエ越えにまつったが、火災に遭（ア）い、現在地へ移し奉った。以後秘仏として崇拝してきたが、大正５年に至り、旧８月８日を例祭日とし、松橋、中村、西ノ又の氏子一統と別当三蔵院と協議の上開帳することにした。このことは現在も固く守られている。松橋薬師如来は、もちろん葉山の本地仏である薬師如来であり、当地方の葉山信仰を物語る資料としては最古の物ではないかと思われる。現在に於いても、近郷の人々の信仰が厚く、旧４月８日、６月８日、８月８日の祭礼には、遠く宮城県や山形市あたりからも参詣（サンケイ）人がある。三蔵院のつくる薬湯の効用が確かであるといい、求める人が多い。また近年まで家伝の目薬も作っていたという（『舟形町史』による）。

昭和37年山形県文化財保護協会により貴重文化財に指定される。

平成元年８月23日撮影

平成元年８月23日群馬県立女子大学助教授麻木脩平氏により薬師如来座像が解体調査された。その調書全文を揚げておく。（麻木先生は、以前文化庁に勤務し、仏像の国指定等の調査で活躍）

松橋薬師堂木像薬師如来座像調書

像高　91.4cm　　品質　木造　　彩色　白毫水晶（カ）

形状及び現状

螺髪切子形。ただし、後頭部の螺髪の彫出は省略。衲衣は左肩を覆い、右肩に軽く懸かる。両膝部欠失。左手は肘から先を欠失。右手も肘から先を折損し、折損した右前膊部（脈はく部）は残存するが、火災のため半ば炭化している。

構　造

頭部は一材製で、内刳りがなく、割首の跡がある。体幹部は前後割矧ぎで、内刳りを施し、右肩から肘まで一材を矧ぎつける。左肩から肘までは、体幹部材と共木である。

彩　色

現状は顔面・体部に胡粉が残り、一部に彩色で袈裟を描き出すが、当初のものではない。

製作年代・その他

やや下ぶくれで伏し目の優しい顔立ちや、均斉のとれた肉づけ、彫りが浅く、稜を立てないゆるやかな衣文の彫出など平安後期のいわゆる定朝様（氏名・武士名）の特色を示している。しかし構造を見ると、体部だけ割り矧いで内刳りを施すが、頭部は首のところで体部と割り離しただけで、内刳りなどしないなど、かなり変則的な造像法をとっている。（普通の割刳り造りならば頭・体幹部を通して割矧いで内刳りをする。）こうした点は、この像の作者が地方的な仙師ではなかったかとの推測を生む。地方作の場合、明確な制作年代を推定することは難しいが変則的な造像法をとっているわりには様式はかなり正統的で、定朝様が広く東北地方まで行き渡った時期の制作と考えられる。そうした点からこの像は、12世紀前半くらいに位置づけるのが適当かと思われる。なおこの像は、左肘から欠失し、薬壺をもっていたかどうか不明であるため厳密に云えば薬師如来像であるかどうかは、何とも云えない。

福昌寺 山門 格天井絵

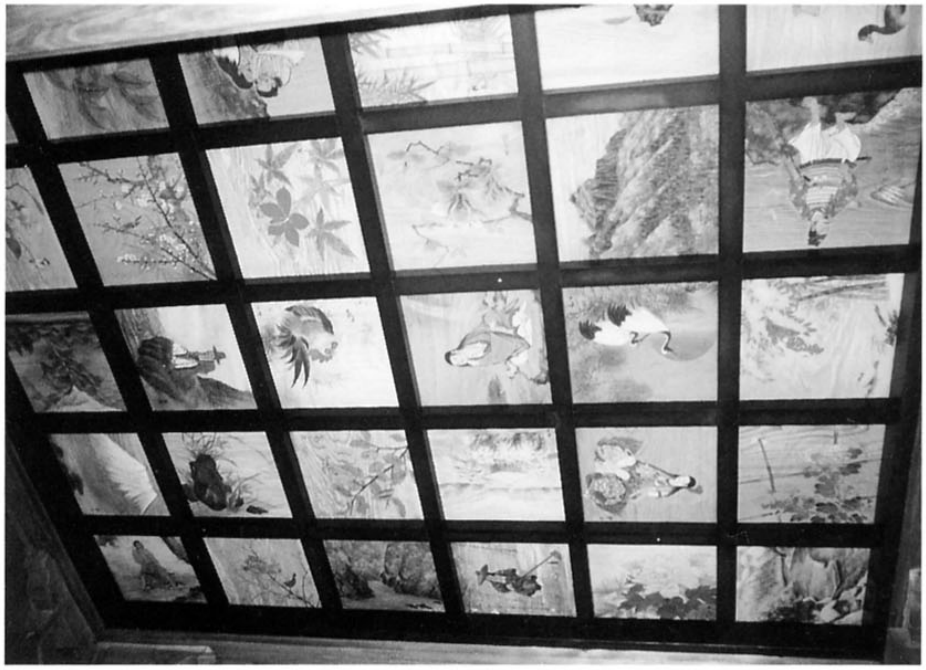
【所在地】 長沢（福昌寺）

この山門は明治24年に再建されたもので、昭和41年に屋根替えをしたものである。前にも天井に絵が描かれていたが、雨風に晒（サラ）されて判然としなくなっていた。この復元も難しいので、昭和58年、新しく描いてもらう事にした。現在の絵は、新庄市在住の日本画家（故）戸（ト）蒔耕古（マキコウコ）先生とその御子息晟光（セイコウ）先生の両人が描いたものである。絵は30枚で配列は写真の通りである。

福昌寺山門格天井絵

1 韓信の股くぐり 晟光	2 柘榴（ザクロ） 晟光	3 秋の小松渕 晟光	4 孟宗 晟光	5 牡丹 耕古	6 冬の小国川 晟光
7 曙の富士 耕古	8 蘭石（ランセキ） 晟光	9 佛手柑（カリン） 晟光	10 雪の松島 耕古	11 文殊菩薩（ボサツ） 耕古	12 菊に赤トンボ 耕古
13 夏の白糸の滝 晟光	14 太公望 晟光	15 竹に双鶏（ソウケイ） 耕古	16 菊慈童 耕古	17 日の出に松上鶴 耕古	18 雪の南天 耕古
19 枇杷（ビワ）に雀 晟光	20 紅梅に鶯（ウグイス） 耕古	21 紅蜀葵（モミジアオイ） 晟光	22 花木蓮 晟光	23 春の竜馬山 耕古	24 島の為朝（タメトモ） 耕古
25 司馬温公（シバオンコウ） 晟光	26 桃 晟光	27 寒山拾得（カンザンジュトク） 耕古	28 竹に雀 耕古	29 二見ヶ浦の日の出 耕古	30 芙蓉（フヨウ）に水鳥 耕古

入口



墨画山水漢人図屏風（菊川淵斎筆）

舟形町指定文化財（平成10年４月24日指定）

【所在地】　長沢（福昌寺）

本絵は６曲１双屏風の各曲に貼られた紙本墨画山水漢人図計12枚である。各絵は縦140.5㎝、横56.5㎝の大きさで、画面一ぱいに山水草木人物を配している。図柄は柳下貴人、松樹山荘、車上貴人、貴人書見等々さまざまであるがいずれにも１人ないし５人の漢人風服装の人物（男女）が大きく描かれている。筆づかいは丹念で力強い。

各画面下方に丸型の朱印があり、左右右端の画面下方に「淵斎橘真利」の墨書銘があって、作者を明らかにしている。

絵を貼って仕立てた屏風の大きさは左右隻共縦179.4㎝、横372.8㎝、各曲の大きさは縦179.4㎝、横60.7㎝（但し、両端曲は63.0㎝）である。

絵師菊川淵斎は名を菊川守利といい、天保６年（1835）酒田の出生。父は元京都の公卿侍であったが、いつの頃か酒田に移り、庄内地方の隠陽師の元締めを勤めていた。守利は若くして画家を志し、始め仙台の佐久間六郎に学び、さらに江戸に登って幕府絵所扱いの狩野深淵の門に入った。その後帰国の途中、新庄に立寄ったころ、金沢の宝鏡院や庄屋の広野米吉などの依頼により絵を描いた。これが縁となって次々と絵の注文が舞いこみ、慶応２年彼は新庄に永住を決意したという。

彼は戊辰戦争のとき、仙台に逃れたが、明治２年新庄に帰り、現在の日新小学校前に居を定め、地域の人々のために多くの絵を描いた。

彼は花鳥、山水、人物、植物等々描けないものはなく、軸物、屏風、襖絵、絵馬など多くの作品を残している。とくに山水が得意であった。

彼はまた多くの弟子を養成し、郷土画壇の礎を築いた。後に名を成した狩野深令、郷土画家尾形芦香などはみな彼の門下である。

彼の作品としては、新庄市鳥越伊藤義一氏所蔵の山水図屏風（６曲１双）、同市金沢長倉洋一郎氏所蔵山水楼閣図屏風などの力作があるが、福昌寺所蔵の本図屏風もこれらに劣らない作である。筆づかいは丹念で力強く見事なものである。

福昌寺所蔵となった経緯

本屏風の裏に「施主」として大場清太郎以下37人の氏名と「世話人」として沼沢喜平治以下４名、「惣世話人」として伊藤惣兵衛とあり、「当寺三十一世義照代　明治十三年七月」の墨書がある。

新山神社　鰐口（ワニグチ）

舟形町指定文化財（昭和60年２月９日指定）

【所在地】　長沢（新山権現別当）

１．品質・形状・寸法・重量等

青銅製直径16.0㎝、厚さ3.9㎝、表面中央の撞座（ツキザ）の部分が大きく破損し、また、面側右端にかけて一条の大きなひびがある。なお、鰐口の裏側下部の大部分が破損、欠落（ケツラク）している。表面中央部に直径14.5㎝、7.1㎝の二重の円弧（エンコ）と、外縁部に直径14.5㎝、13.8㎝の円弧が鋳出されている。また、側面には四重の線が鋳出されている。上部に吊（ツリ）綱をつける把手（トッテ）がある。重量0.83kg

２．年代・沿革・由来等

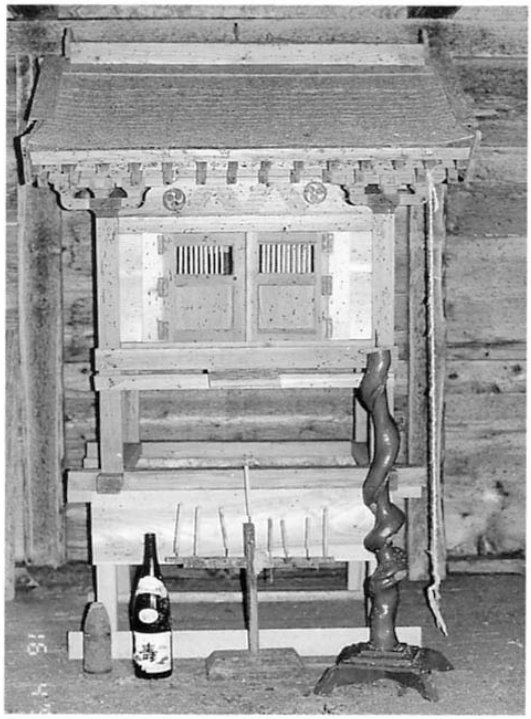
表面外周部の上部に「新山」また、上から「平（カ）左京応仁三年三月大美（カ）」と鋭い線で陰刻されている。銘文の「新山」は長沢の新山神社（権現）、「平左京」は寄進者の名と思われる。伝えによれば、当地の豪族長沢楯楯主長沢監物が奉納したものという。もとは新山神社に吊（ツ）るされていたものであるが、現在は同社別当文珠院に所蔵されている。最上郡の古い鰐口としては戸沢村角川の今神神社に文安４年の銘の鰐口があったが、現在これが東京に移されているので、現在においては、この新山神社の鰐口が郡内最古のものである。本鰐口は応仁３年（1469）３月の銘を有し、当地方のこの時代の歴史資料としてたいへん貴重である。

３．その他

最上地方の古い鰐口について『舟形町史』に詳（クワ）しい。

〔調査員　県立博物館長　大友義助氏（昭和60．２．２調査）〕

長沢新山神社　平成７年５月25日撮影



長沢新山権現奥ノ院

林昌院　肩衝筒釜（カタツキツツガマ）

舟形町指定文化財（昭和60年２月９日指定）

【所在地】　富田 林昌院

１．品質・形状・寸法・重量等

鉄肩衝筒釜。高さ23.4㎝、口経11.5㎝、胴経21.8㎝、底経20.4㎝、重量4.5kg。蓋（フタ）の直径12.5㎝、蓋の重量0.3kg、環付は縦9.2㎝、横0.8㎝の楔形（クサビガタ）の突起で、その中央に青銅製の環（ワ）がつき、この環が直接釜に触れないようにしている。胴の部分に細い線で片面に五三の桐２個、他面に紅葉７個が鋳出されている。底部の一部が破損しているが、作りが質素で力強く全体の形はすっきりした優れたデザインである。

２．年代・沿革・由来等

本釜には銘文がなく、また、由緒書（ユイショガキ）も見当たらないので、明確な作製年代や作者は不明である。伝えによれば、林昌院開基の愛用の品という。林昌院は天文13年（1544）、領主猿羽根氏没落の折、当時の楯主夫人林昌院殿源室妙本大姉の発願によって開かれたと言うから、本釜はほぼこの時代の作と考えられる。本釜は猿羽根氏及び林昌院の歴史を物語る貴重な資料である。

３．その他参考となるべき事項

林昌院は猿羽根氏の菩提寺（ボダイジ）であり同氏歴代の位牌（イハイ）がまつられている。又、南方向に同氏の楯跡がある。楯について『舟形町史』に詳しい。

〔調査員　県立博物館長　大友義助氏（昭和60．２．２調査）〕

平成11年７月27日撮影

松橋薬師如来洗米鉢（センマイバチ）

舟形町指定文化財（昭和60年２月９日指定）

【所在地】　松橋薬師堂

１．品質・形状・寸法・重量等

木製品。トチと思われる原材をろくろで削（ケズ）り成形している。口縁部直径42.3㎝、高さ16.1㎝、底部直径26.6㎝、高さ3.4㎝の高台がある。厚さ1.2㎝。底部の一部と口縁部の一部が破損している。素木のままで漆（ウルシ）など塗っていない。内側と外側のろくろ目が美しい。重量2.26kg

２．年代沿革由緒等

本洗米鉢の外側面に「奉納南無薬師十二神御鉢」「元亀三壬申四月八日」「諸願成就□□□□」「松橋村」と５行にわたって墨書してある。又、底部中央に「南無薬師十二神□□」その左右に「松橋」「別当代也三蔵院」「諸病悉除（シッジョ）」の墨書がある。本洗米鉢の墨書により元亀３年（1572）に松橋村の人々が薬師如来に奉納されたことが知られる。紀年銘のある洗米鉢としては県内最古のものと思われる。松橋薬師如来座像は霊峰葉山の本地仏として山頂にまつられていたが、大同元年（806)、字ユカエ越えに移され、更に現在地に移されたという。この年代については疑問があるが、本座像は識者の鑑定によれば、藤原仏といわれ郡内では最も古く最も美しい仏像である。なお、この薬師如来は人々の病苦、特に眼病を治す仏として信仰が厚い。本洗米鉢は薬師如来座像と共に当地の葉山信仰の歴史を物語る資料として貴重である。

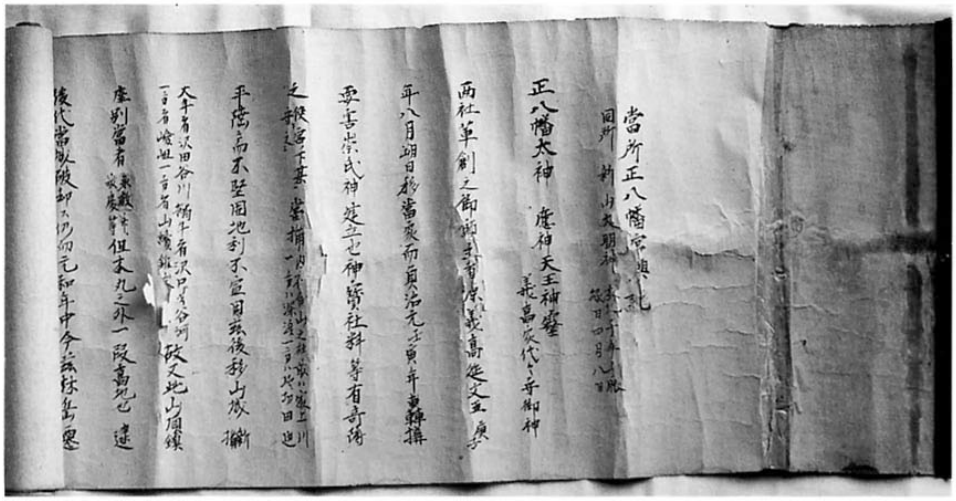
〔調査員　県立博物館長　大友義助氏（昭和60．２．２調査）〕

当所正八幡宮興記

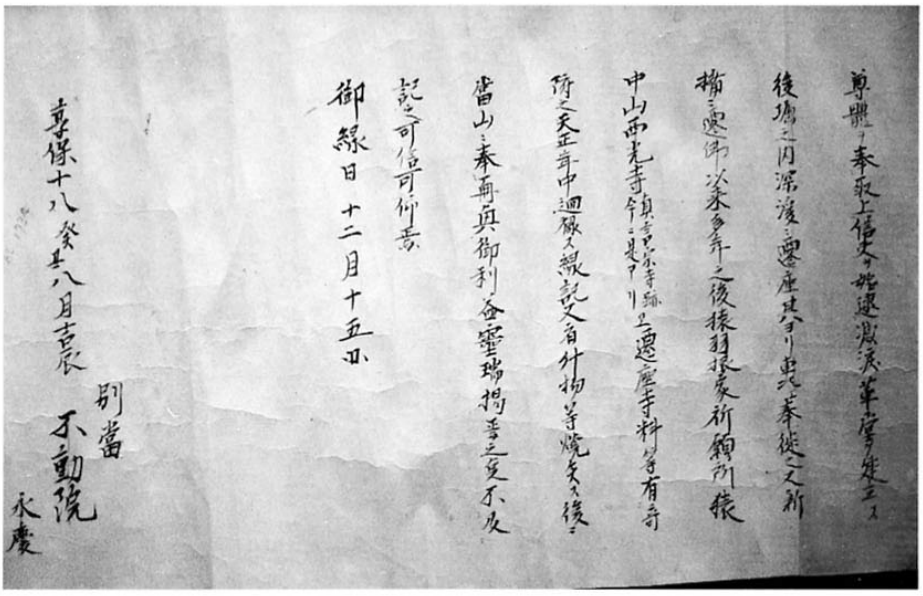
【所在地】　富田 八幡神社別当

不動院　義高家に伝わる巻き物である。巻末に享保18年（1733）８月吉辰　別当不動院永慶とある。表に正八幡の由緒（ユイショ）・阿弥陀如来の由緒・更に猿羽根家系図が記され、裏面に不動院別当の系図が記されている。縦28.5㎝、横409.8㎝。

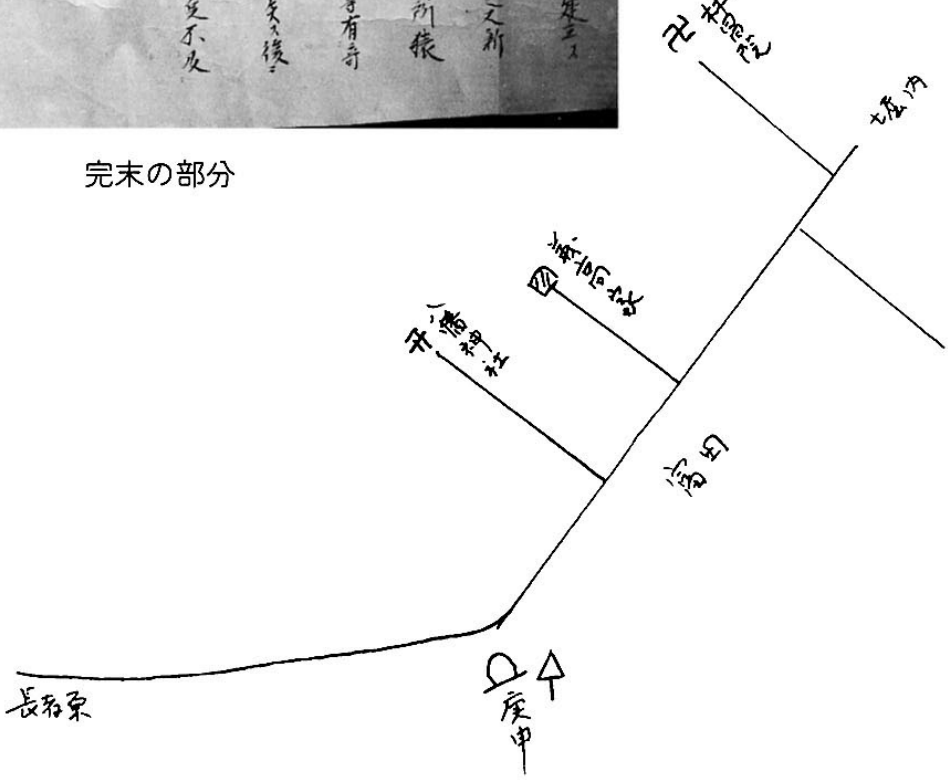
『増訂最上郡史』にも本文が記されており、歴史資料として貴重なものである。僅（ワズ）かに虫食いはあるが、保存状態は良好である。



平成５年11月27日撮影



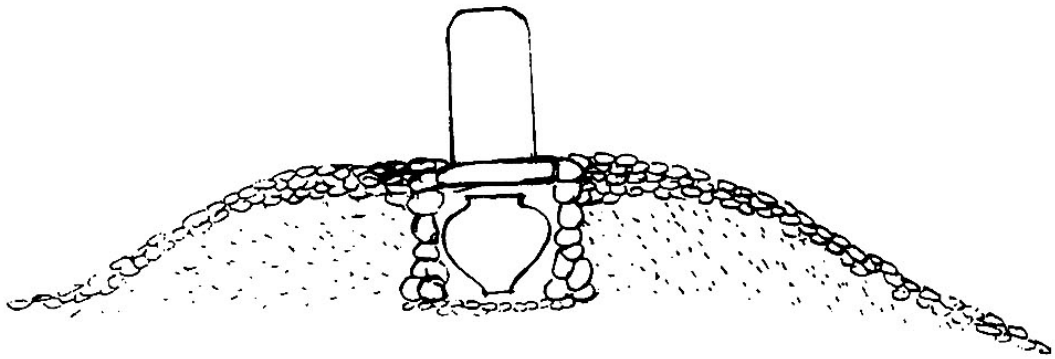
完末の部分



経（キョウ）甕（ガメ）（木友経塚出土）

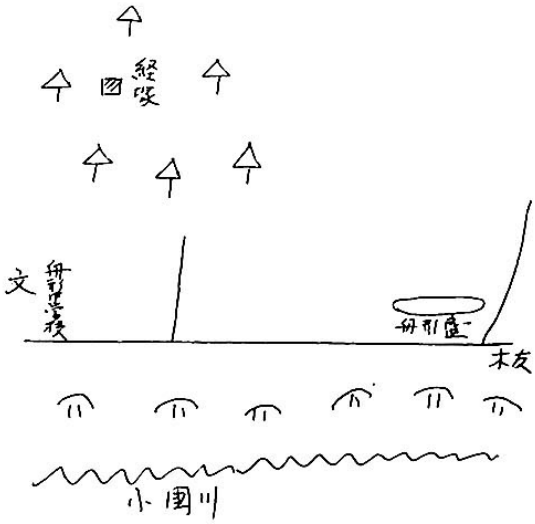
【所在地】　町歴史民俗資料館

木友地区に通称舟形の栄吉山と呼ばれる山林内に経塚がある。東西3.7m、南北8.8m、高さ60cmの規模の壇（ダン）を造り、その上に自然石が１個立てられてある。祈祷壇（キトウダン）か経塚と考えられる。昭和55年９月１日学芸員大友義助氏と共に、沼沢時夫氏立合いのもと発掘調査した。一辺の長さ60cmの石郭の中に甕が納められていた。写真のように上から押し潰（ツブ）されたように破損していた。これを大友氏が復元し、現在歴史民俗資料館に保管されている。甕の大きさは、高さ38.3cm、肩部の直径は39.2cm、口縁部直径22cm、底部の直径13.5cm、器壁の厚さ1.2cm（平均値）の大きさである。年代は室町時代と推定されている。甕の中には何も見あたらず、甕の底にある土を県文化課に依頼、分析したが、石灰分、燐分等は検出されなかった。よって人骨ではなく、経文を入れた経甕と考えられる（『舟形町史』による）。



舟形町木友山（経塚山）経塚略図　昭和55年９月１日調査大友調査作図

発掘調査　学芸員　大友義助氏・沼沢時夫氏・溝口仁氏　昭和55年９月１日撮影



発掘前の経塚、自然石がたっている

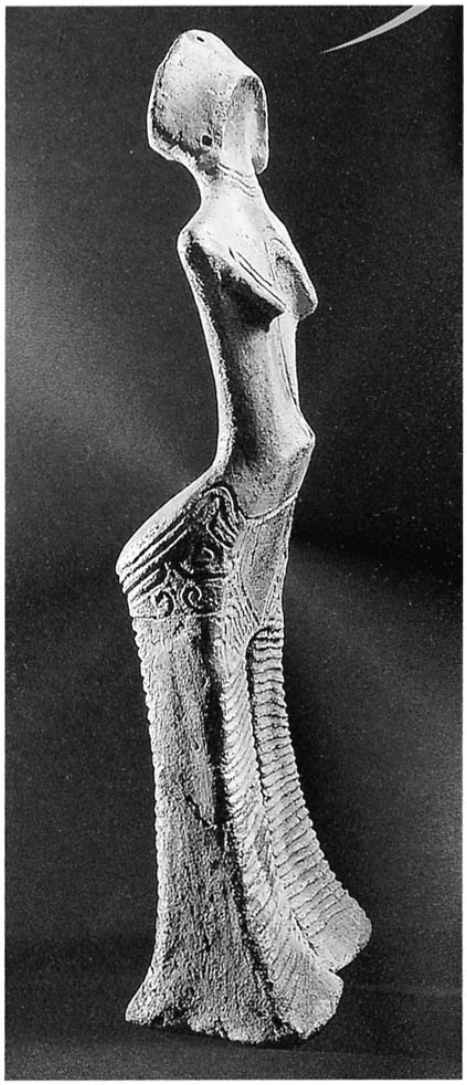
西ノ前遺跡土偶（重要文化財）

【所在地】　山形県立博物館

この土偶は平成４年の調査で発見された土偶である。半径約３ｍの範囲内から出土した５つの破片を接合し元どおりに復元されたものである。高さ45㎝、最大幅17㎝、重さ2.8㎏、現存する土偶の中では国内最大のものである。姿形は直線や円弧をモチーフとして極端なまでに抽象化されており、顔面表現の省略、長くしっかりとした脚、くの字に張出す臀部、W字形の乳房などに特徴がみられる。縄文時代中期の典型的な完形土偶として貴重であり、且つ、日本一の大形土偶として有意義との理由で平成10年６月、国の重要文化財に指定された。

西ノ前遺跡出土土偶について

出土遺跡名	西ノ前（にしのまえ）遺跡
所在地	山形県最上郡舟形町字西ノ前
種別・時期	集落跡・縄文時代中期（約4,700年前）
遺跡確認	昭和61年10月、県教育委員会が行った遺跡詳細分布調査で確認
遺跡範囲	東西85m、南北125m、面積10,500平平方メートル
立地	小国川左岸の河岸段丘、標高72m
発掘調査主体	山形県教育委員会
発掘調査目的	「一般国道13号線尾花沢新庄道路改築事業」に伴う緊急発掘調査
発掘調査時期	平成4年6月8日～10月6日（78日間）
調査面積	4,450平方メートル
文化財指定等	山形県指定有形文化財：平成8年7月 国重要文化財指定　　：平成10年6月
調査概要	遺構：縦穴住居跡9棟、フラスコ状土壙（どこう）60基 遺物：縄文土器・石器他（整理箱　900箱）
出土土偶	出土土偶総数：48点



西ノ前遺跡出土の縄文ヴィーナス

全形の復元出来た土偶は、大形土偶の1点だけでした。他は推定復元高が15～25cm内外と考えられる土偶の部分片（残欠）です。

このような土偶の大小から、総べてが同じ目的で作られたものではなく、各々の機能や役割に違いのあったことが推測されます。

大形土偶は、捨て場と考えられる谷状の凹地から多数の縄文土器に混じって出土しました。深さは現在の地表面から約1.8m程下のところです。

出土状態は、頭、胴、腰、左右の脚の5つが半径およそ3mの範囲内にまとまっていました。これら5つに別れた部分が組み合わされ、接合された結果、全身の高さが45cmという国内では最大級の超大形土偶であることが明らかになりました。

土偶は女性像にかたどられ、しかも妊婦の状態を表わすものが大半です。また、完全なものや全身の復元できる例はごく稀で、大抵はバラバラな部分や残欠で発見されることから、何らかの儀式の後にわざと壊して捨てたものだと考えられています。

西ノ前遺跡の大形土偶はこのような意味で、大変貴重であり、日本の縄文土偶を代表する一例と言えるものです。

このように、西ノ前遺跡から出土した土偶は大形土偶を含む良好なまとまりを見せる出土品です。縄文時代中期の前葉～中葉（4,700年前）の時期（大木7b式～8a式中心）に係わる文化様相の一端を今に伝える貴重な文化財と言えるものでしょう。

福　昌　寺

【所在地】　長沢

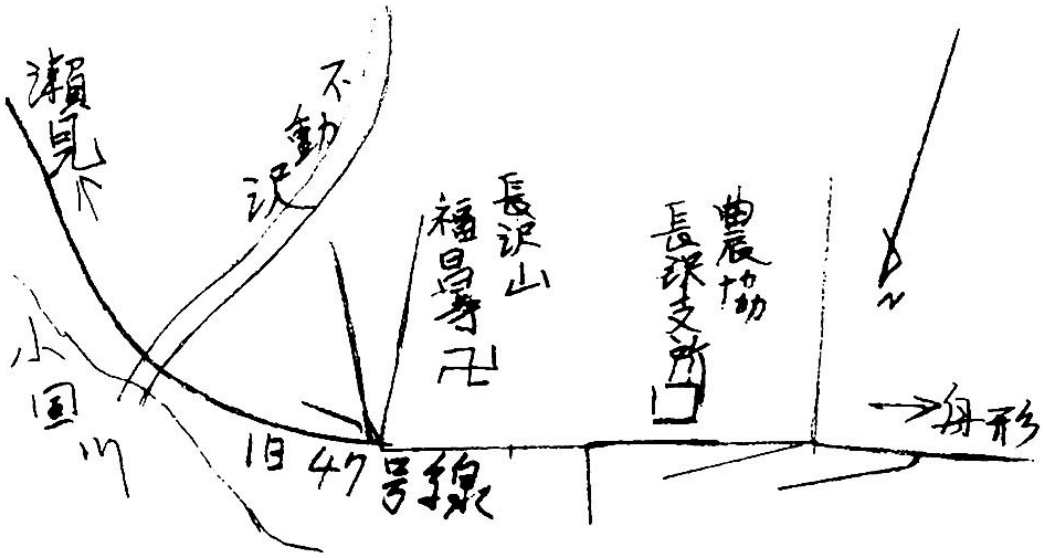
舟形町の４つの寺のうち最も古いのが長沢山福昌寺である。この寺は、長享（チョウキョウ）元年（1487）９月24日の開山といわれている。

本山は大石田町黒滝にある向川寺（コウセンジ）で開祖は朴道良淳（ボクドウリョウジュン）大和尚と伝えられている。向川（コウセン）寺は、曹洞宗大本山総持寺の直末寺で、その末寺は山形県内はもちろん、宮城県や秋田県にも数多くあるが、その中でもこの福昌寺は格式の高い寺とされている。

近年改築されたが、以前の本堂は棟札によると文化14年（1817）に建てられたものだという。

『ふるさと歴史散歩』によると、福昌寺が火災の際、大般若経も焼けたが、その焼け残りの経本の比較的良いものを、檀家のおもだった家に分け与えたといわれており、今でも大切に家宝として伝えている家があるという。又残りの経本を野原に埋めて大供養をしたと伝えられ、その地が経檀原の地名のおこりと伝えられている。

福昌寺の境内は広く、立派な山門がある。その山門の天井には美しい絵が描かれている。又、樹令200年を越えるという大銀杏がそびえ歴史を語っている。


瀬見
不動沢
長沢山
福昌寺
農協
長沢支所
舟形
小国川
旧47号線

定　泉　寺

【所在地】　舟形

平沢山定泉寺（ヘイタクサンジョウセンジ）は、慶長２年（1597)、長沢山福昌寺５世寛山良廓（カンザンリョウカク）大和尚が開山した寺である。

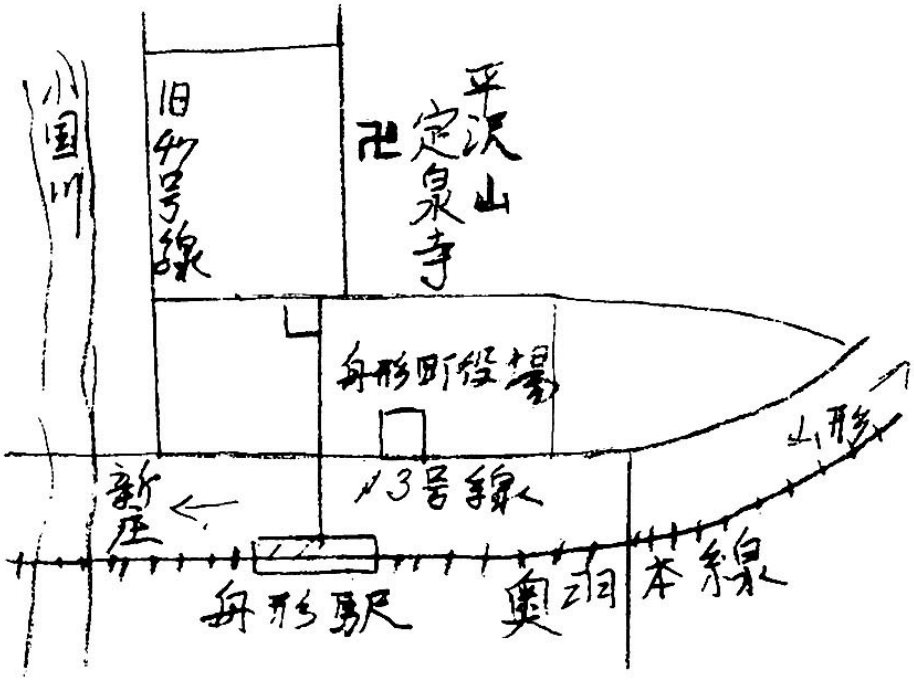
定泉寺は慶応２年４月舟形大火の際に類焼し、寺の宝物、書類の一部を焼失したと伝えられている。

現在の過去帳は、明治42年に34世住職の弘道和尚が焼残った過去帳や古い日牌（ニッパイ）帳などを基にして再編集したものである。

言い伝えによると、舟形は、集落も定泉寺も以前は現在の平沢川の上流、現荷渡り権現の近くに在ったという。この地は、昔最上川から荷揚げされた荷物は、小国川より平沢川を遡り、村山方面や小国方面にも運ばれる交通の要所であったという。そこに今でも寺屋敷と呼ばれる土地があり、平沢山定泉寺跡と伝えられている。

その後、年代は定かでないが、定泉寺は集落の移転とともに猿羽根山北面ふもとの地に移り、次は元屋敷とよばれている現ブエモン稲荷附近に移り、その後、現在地に建てられたという。

猿羽根山地蔵堂は定泉寺が管理にあたっている。


小国川
旧47号線
平沢山
定泉寺
卍
舟形町役場
13号線
新庄
舟形駅
奥羽本線
山形

林　昌　院

【所在地】　富田

龍沢山林昌寺は猿羽根家６代高春公（高雲斎）の奥方法名林昌院源室妙本大姉が天文13年（1544）６月、楯山の一角に建立した寺である。開祖は清水領内会林寺の２世満室珠顔和尚といわれる。

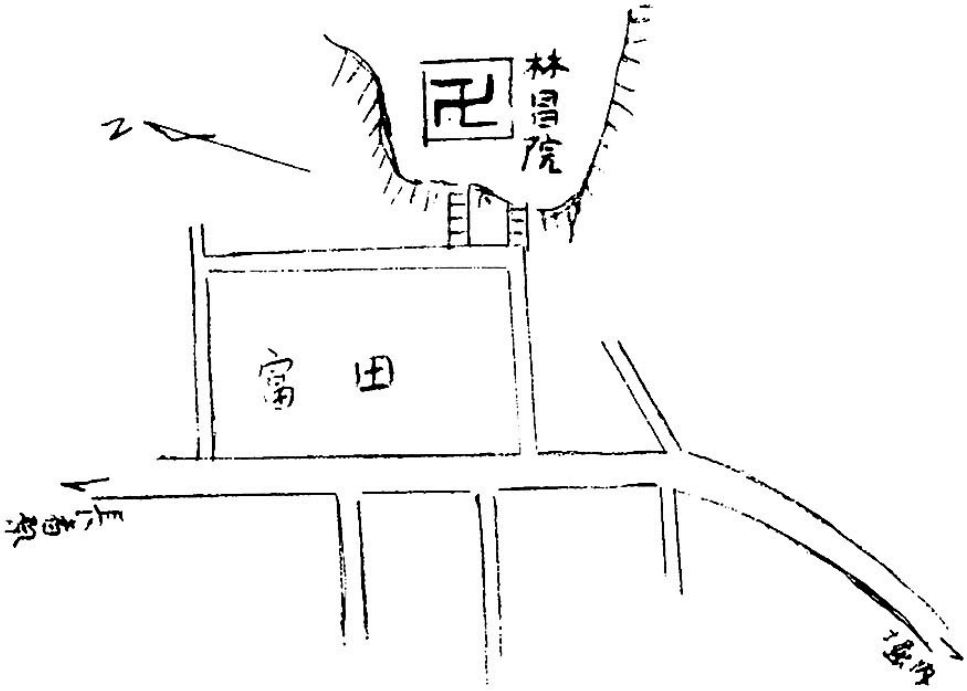
７代楯主義舜（ヨシズミ）は山形最上氏に従わず、天正17年６月17日長瀞で切腹、猿羽根家は断絶した。

この寺には、猿羽根家代々のうち６代高雲斎（高雲院）以下の位牌が安置されているが、それ以前のものは見当たらず、墓地も不詳である。ただ、７代義舜の法名は高春院殿輝山光居士といわれ、長者原に高春壇という塚がある。

現在の寺は、文化７年（1824）４月に16世義抽和尚の代に建替られたものであるが、旧楯山の寺からの移転年月日は不明である。

開基林昌院殿源室妙本大姉が日常愛用していたと伝えられる茶釜が現存している。

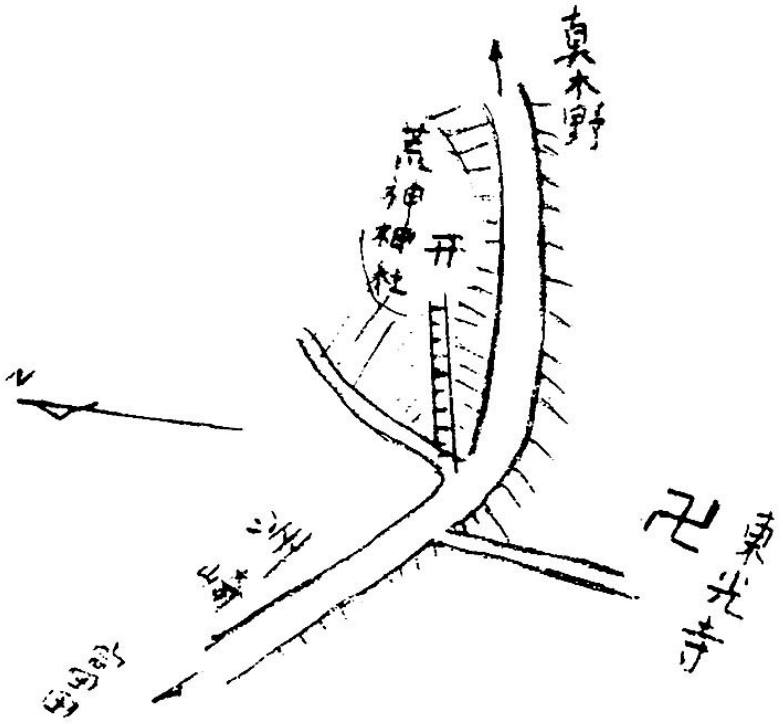
（林昌院肩衝筒釜の頁参照）


林昌院
富田

東　光　寺

【所在地】　洲崎

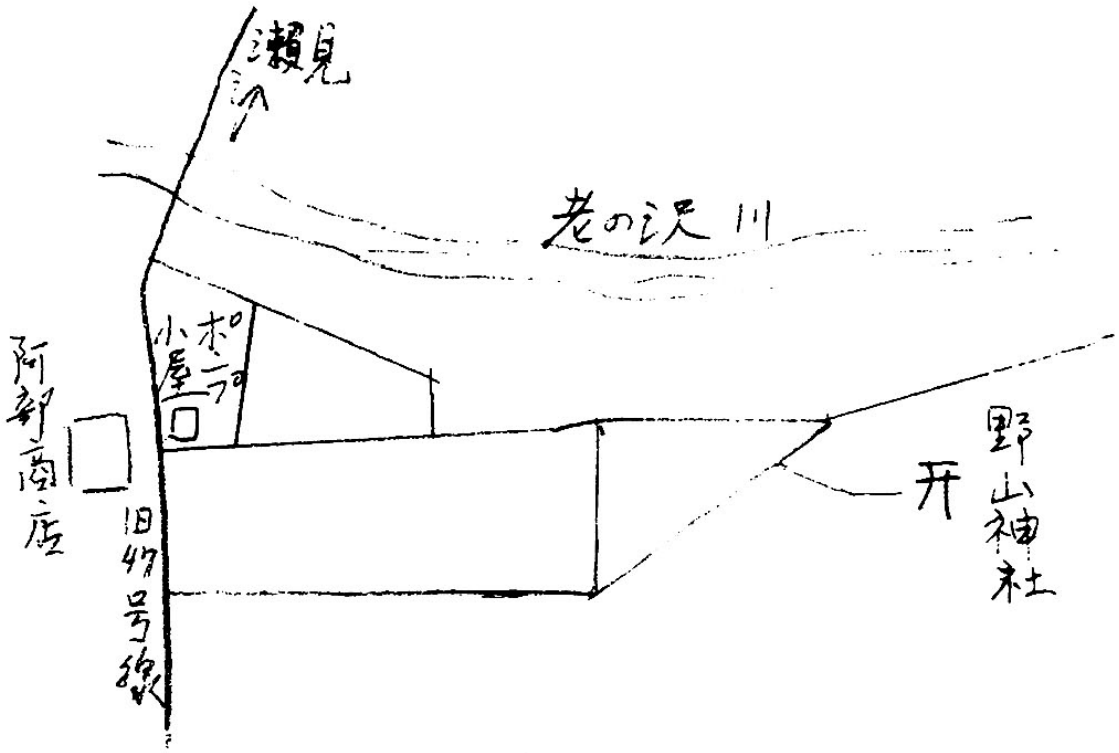
洲崎集落の南端に在り、天正４年（1576）に林昌院３世祥室芳吉大和尚の開基と伝えられる曹洞宗の寺である。以前は本堀地区にあったが、宝暦７年８月20日に本堀より現在地に移ったものである。記録によると、宝暦７年（1757）７月、本堀内が大洪水と火災に罹り村のほとんどが流失、或は火災のため全滅して、復興できない状態となり、現在の堀内の場所へ移転したものという。その時、東光寺も村社伊豆神社も現在地に移転したのである。また、本堀内火災時に、東光寺の宝物、什器その他の記録は全部焼失したといわれている。『町史資料集』№３によると、村移転の際、時の藩主より、村役人の手当として米４斗入30俵、罹災民１戸に対して米４斗入20俵宛の救助を受け、また、他町村より人足300余人の供与に依って、今の堀内村が完成されたと記されている。現在の堂舎は、昭和53年１月７日の火災による本堂庫裡の焼失後、再建されたものである。


真木野
荒神神社
開
N
浮島
東光寺

野の山神神社

【所在地】　野（老の沢入口）

九郎沢山の急な長い石段を登りつめた所に山神社が建っている。社殿は17坪と構えは大きく、当町内の山神社としては最も立派な社である。祭神は大山祇命、例祭は４月12日である。由緒沿革は『新庄最上神社誌』によれば、今より（昭和27年）300有余年前石川五郎助の先祖が郷土の産土神（ウブスナノカミ）として山神を勧請（カンジョウ）したものである。その後、安政３年（1856）に再建とある。



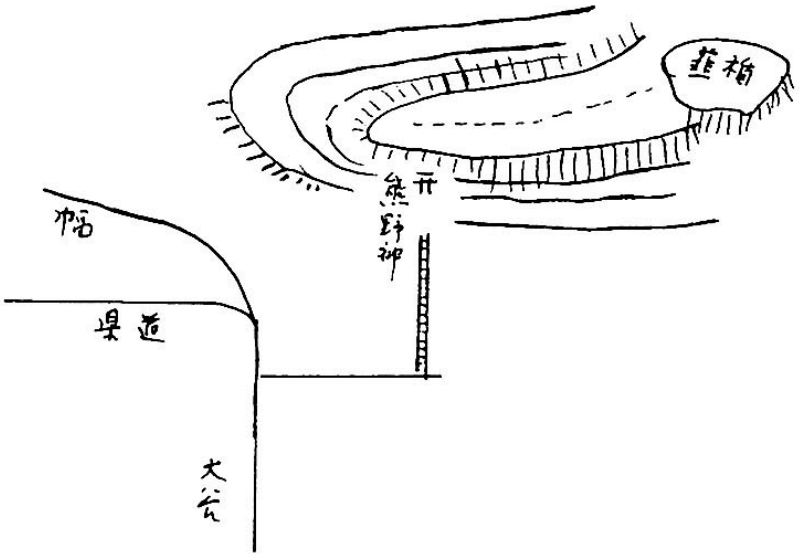
平成７年８月11日撮影

幅の熊野神社

【所在地】　幅

『新庄最上神社誌』によれば、「今より（昭和27年）300年前に阿部重右ェ衛門が長尾熊野神社より分霊奉祀、安永４年（1775）大修理なされた」とある。参道の老杉並木がこの神社の古さを物語る。また、神社裏手山の嶺（ミネ）づたいに登れば韮楯（ニラダテ）がある。神社境内地には、春日神、地蔵尊、稲荷様、古峯神（石碑）等が祀ってある。熊野神社の祭神は、伊弉那岐命（イザナギノミコト）である。例祭日は５月15日。当日は幅神楽（ハバカグラ）が奉納上演される。現在阿部重右衛門家は断絶してなくなった。

平成７年８月９日撮影



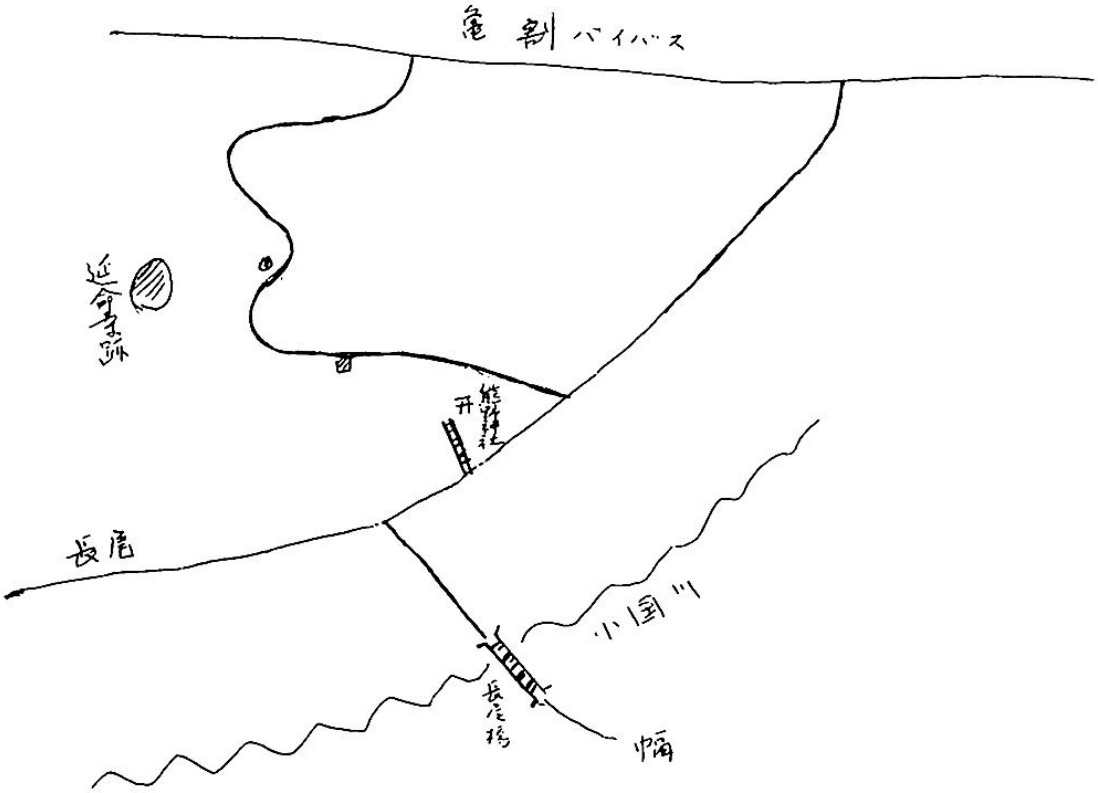
長尾の熊野神社

【所在地】　長尾

長尾村の草分けは、治兵衛・長兵衛・安兵衛・五郎兵衛の４軒といわれる。また、長沢楯主仁兵衛尉の重臣伊藤武七という武士が、長沢氏滅亡後、この地に下って開村したとも伝えられる。長尾の熊野神社は、幅の熊野神社より先に建てられた本宮で修験系の社である。堂内にはほぼ等身大の一本造りの座像が祀られている。また、堂内には貞享元年（1684）他３枚の棟札（ムナフダ）がある。貞享元年の棟札によれば、この度の堂宇造立は「再建」とある。また、裏面に記された墨書銘によれば、この地に熊野神社を勧請（カンジョウ）したのは、貞享年度再興の開基伊藤作太夫（当時庄屋）の先祖道哲居士という人で、深く熊野神社を信仰し、３度までも彼の地に参り、熊野神を勧請したという。道哲居士は、作太夫の18代の祖であるから時代は南北朝にさかのぼるものであろうか。最上地方における熊野信仰は、この時代から江戸時代初期にかけて大いに広まったようである。戸沢村角川奥の今神神社といっている今熊野神社（文安４年（1447）の鰐口がある）もこの時代の創建と思われる。祭神は、伊弉那岐命で例祭日は５月８日。

〔『舟形町史』『ふるさとの歴史散歩』『新庄最上神社誌』による。〕

平成７年４月30日撮影

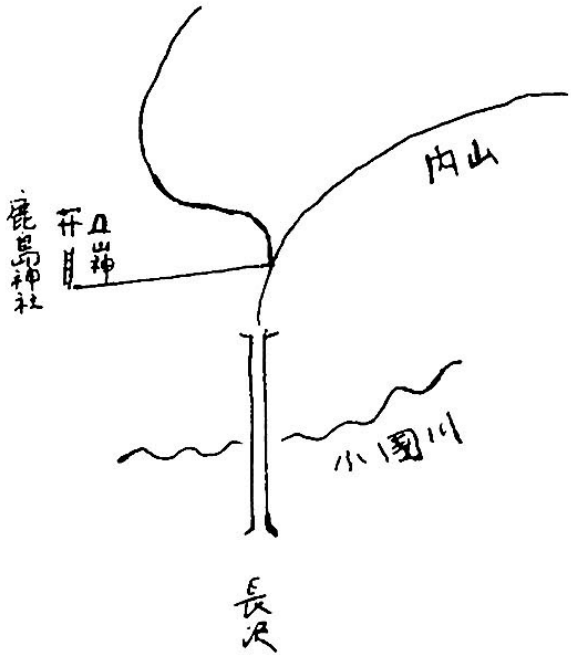


内山の鹿島神社

【所在地】 内山

内山の鹿島神社は鎌倉の落人曽我太郎の姫の家来鬼王、団三郎の両人が姫の菩提（ボダイ）を弔って建てられた神社と伝えられる。団三郎の子孫は、後に伊藤と姓を改めたといわれ、その直系は堀内舟番所の伊藤家であり、又大平の伊藤半兵衛でもあるといわれる。内山にも伊藤の姓が多いが、前記両家は伊藤を名乗る家の中でも古い家柄といわれる。伊藤彦右エ門は鹿島神社の別当を現在も勤めている。団三郎の直系は伊藤彦右エ門家ではないかという向きもある。祭神は武甕槌命（タケミカズチノミコト）である。例祭は８月20日〔『ふるさと歴史散歩』・『新庄最上神社誌』による〕。

平成７年４月27日撮影



長沢の新山神社

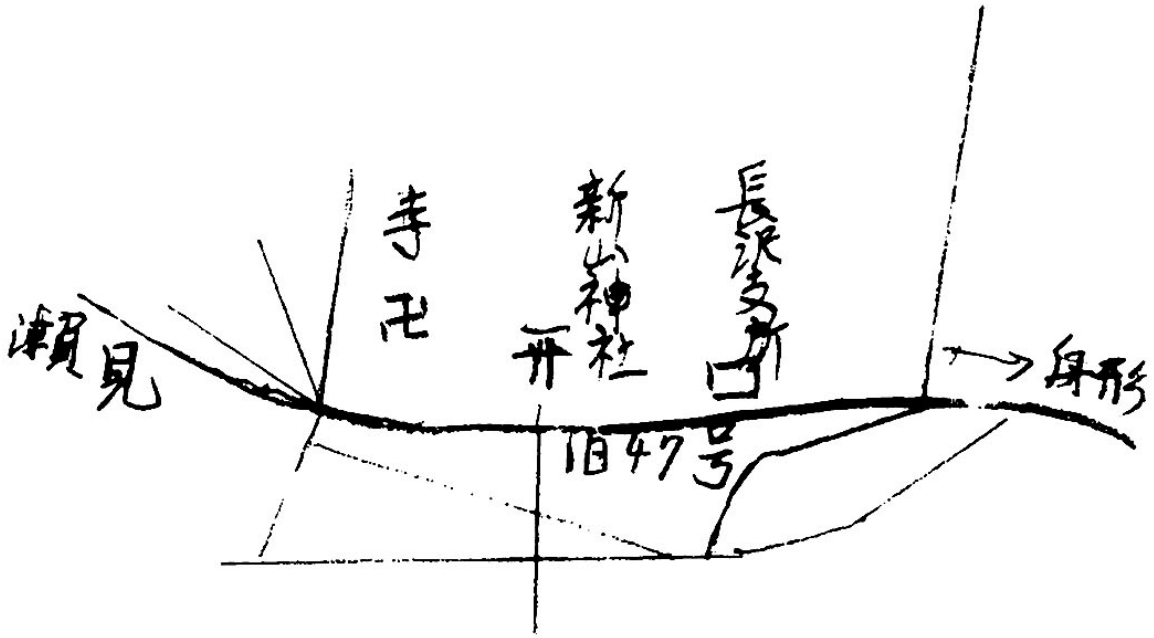
【所在地】　長沢

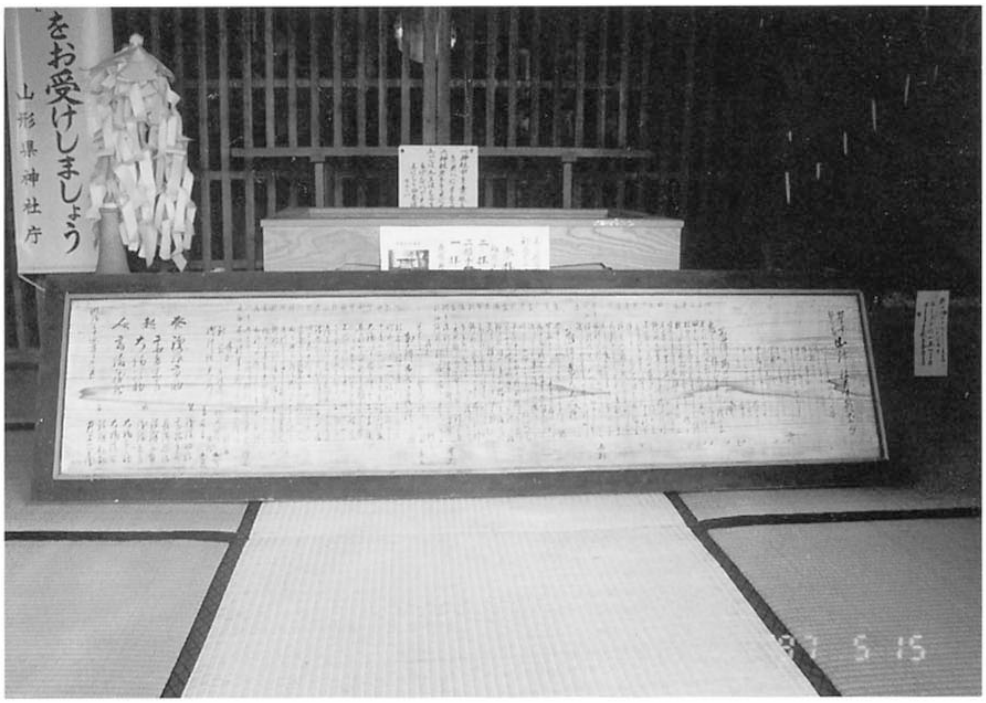
この神社は、新荘領村鑑には、新山権現として記されている。当神社の祭神は月臣（ツキオミノ）（読カ）命（ミコト）で、社殿は元禄8年（1695）の建立と伝えられる。

口伝によれば、曽我某なるものが長沢の守護神として祀ったものといわれている。

長沢山山頂に奥の院として新山権現堂があり、『正徳四年（1712）六月　新山大権現一宇建立　別当文珠院世話人叶内儀兵衛助展』外3名の名を記した木札がある。この文珠院には応仁3年（1469）3月の銘がある古い鰐口が伝えられている。これは、長沢の楯主長沢監物の寄進したものといわれ門外不出の宝とされている（鰐口の頁参照）。

この新山権現は明治以後新山神社とよばれるようになった。

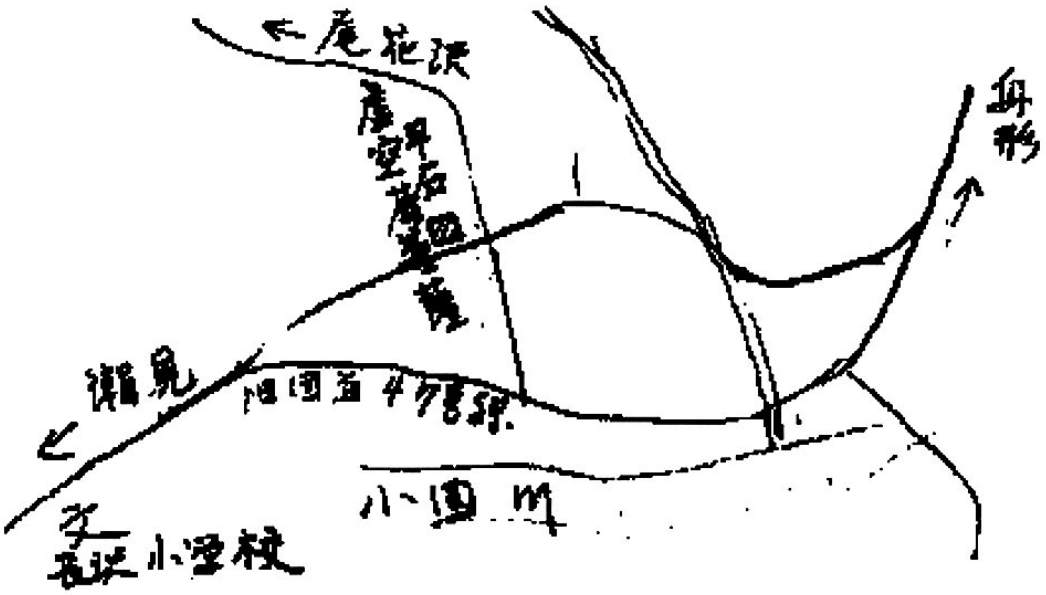



をお受けしましょう
山形県神社庁

平石の虚空蔵菩薩（コクゾウボサツ）

【所在地】　長沢（平石）

この虚空蔵菩薩のあるところが延命寺の山門であったと伝えられているので、この地に延命寺の大迦藍が建っていたと思われる。修繕の折に発見された寄付者名の書かれた板によれば、風化しているが微かに大正14年と読みとれる。その後再び修繕されたが、これは昭和40年代らしいがはっきりしない。



大 平 の 山 神 神 社

【所在地】　大平

大平南方の小高い丘の上に祀っている。堂は２間×２間トタン葺(フ)きの立派な神社である。（当神社は、明治35年に再建されている。）堂内に、漆塗り観音開きの造りで金銅の金具のついた厨子(ズシ)があり、この中に彩色された神像が祀ってある。これを白木造の宮に納めてある。格天井には彩色の絵がある。伊藤半兵衛の奉納した絵馬もある。伊藤家には慶長16年（1611）の伯楽文書、同17年の宛行状がある。

例祭は旧３月12日今も守っている。

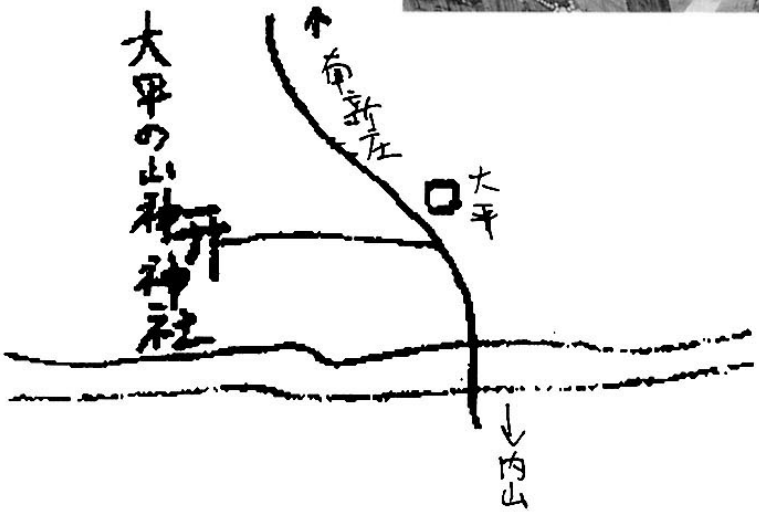
格天井絵（写真は、表紙の次のカラー写真）

山神神社の天井に、36枚の絵がある。作者の銘は無いが、堂内に奉納された絵馬の中に、狩野守親の作品があり、格天井絵の筆使いが絵馬と似ていることから、彼の作品の可能性が高い。

守親は、明治30～40年に活躍した人物で著名な郷土画家、菊川淵斎の長男である。昭和５年50余才で大蔵村清水で死亡。

平成７年８月９日撮影

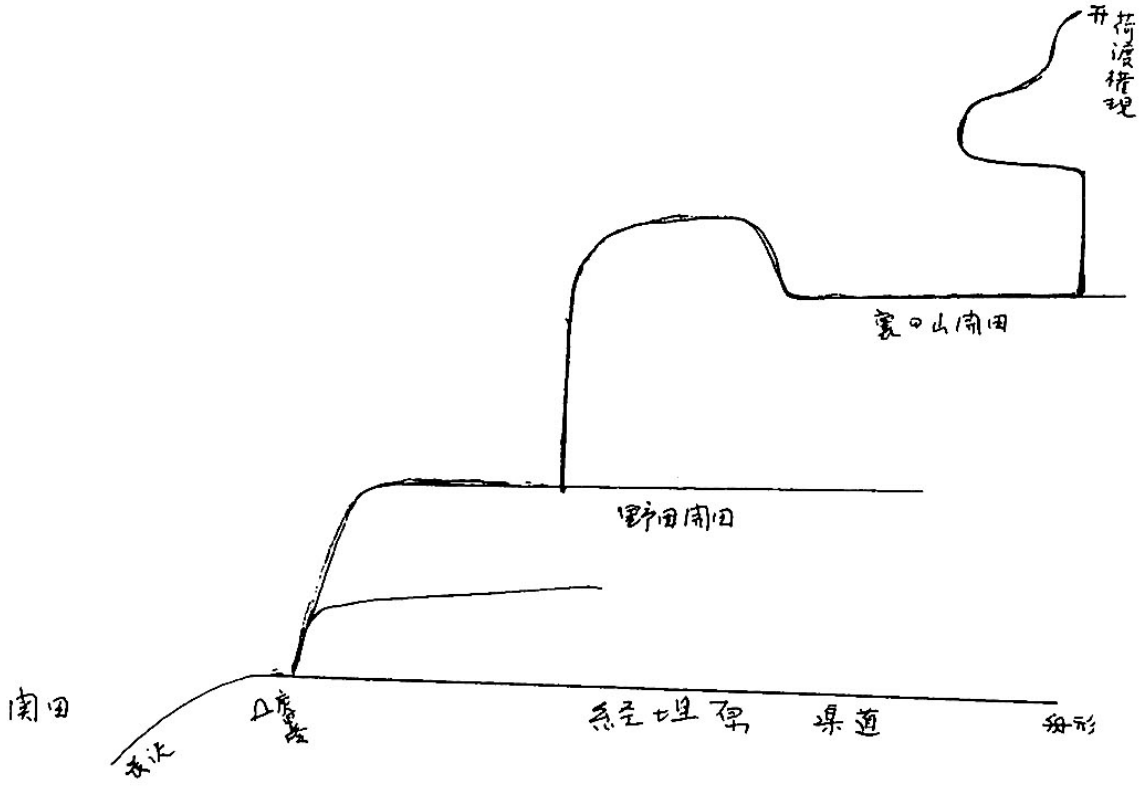
狩野守親画絵馬



荷渡権現　（通称・にわとり権現）

【所在地】　経壇原の南　ツツ峰

『新庄領村鑑』によれば、羽黒権現社内八間四方権現とばかりある。付近一帯を下平沢といっている。祭神は羽黒権現と考えられる。ここ下平沢は昔から交通の要地で、最上川舟運で運ばれてきた荷が富田の轟に荷揚げされ、小国川を遡って、平沢川添いに運ばれ、この地で小国郷へ荷物を引渡されたという。権現から見下す処が広場になっており、人夫宿や馬小屋が建てられていたといい、付近を屋敷と呼んでいる。現在では開田化され、その面影すらない。また、この近くに寺屋敷という場所があるが、現在舟形にある定泉寺の元の敷地でなかったかとも考えられる。また、にわとり権現の呼び名は荷渡しが訛って、にわとり権現となったものと思われる。咳の病「トリシヤブキ」の咳の音がにわとりの鳴き声に似ていることから、咳の神として広く近在に深く信仰されていた（『ふるさとの歴史散歩』参考）。



平成７年４月５日撮影

荷　渡　権　現

舟形八幡神社

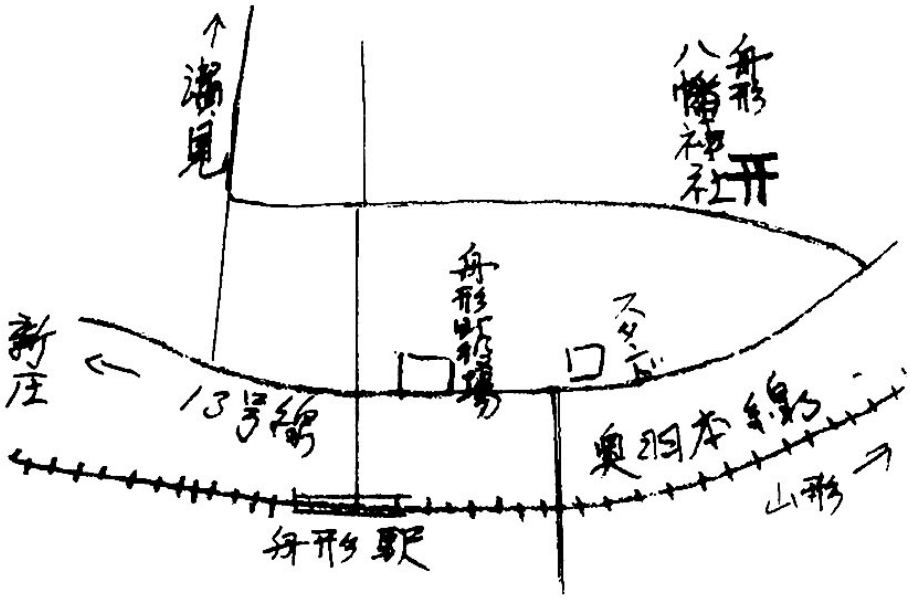
【所在地】　舟形

『新庄最上神社誌』によれば、以下の通りである。

由緒沿革

当八幡神社の創立は不詳なるも、伝承に依れば、元和３年３月15日、清水大蔵太夫の家臣、沼沢新左衛門の尉、郷土の守護神として、又武運長久祈願の為、男山八幡宮より勧請し、字八幡堂、現在の舟形駅西方100ｍ防雪林内に鎮座し、楢沢出羽守に別堂を命ず。正徳年間、小田山の源泉を利用し、開田地となるを以って、正徳３年、字小田山に遷座する。

その後、当時の集落だった平沢、元屋敷より北東地区に移住する。変遷により、文化10年、字舟形現在地に遷座するに至った。しかし慶応３年４月、舟形大火により、民家数十戸、神社、寺は勿論、関係書類、悉皆焼失せり、傲（ゴウ）神殿として20数年続き、明治27年、舟形字紫山の名工、松本永作氏の請負で明治29年９月15日、総欅造りの八幡神社が新築され現在に至る。



平成７年８月９日撮影

名工宮大工松本永作氏
の傑作である

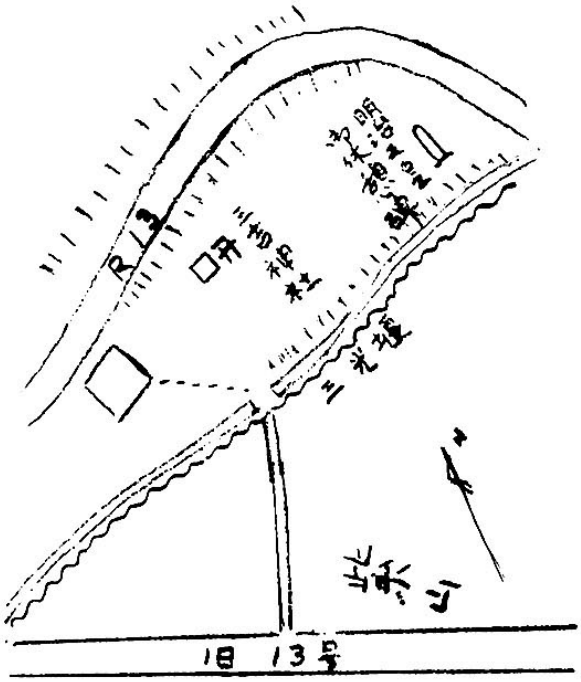
紫山の三吉神社

【所在地】　紫山

祭神は大名持命・少彦名命といわれ、力の神であるという。大平山三吉神社の本社は、秋田市北東一市三郡を境する霊山大平山に祀られている。

明治24年８月17日に渡辺金助が紫山部落の守護神として当地に奉祭した。その後、神殿が老朽化したため、渡辺忠五郎が発起人となり、部落の人々、及び有志の浄財により、昭和52年８月に現在の神殿に改築された。

奉納
三吉神社


R13
旧13号

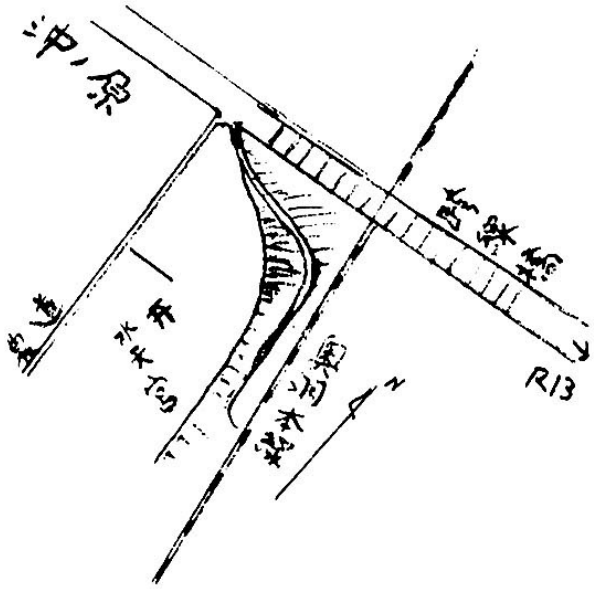
沖の原　水天宮

【所在地】　沖の原

当水天宮は大正７年（1918）に三光合資会社社員の原吉弥が東京都日本橋の水天宮より分社したものである。祭神は天御中主神（アメノミナカヌシノカミ）で安産・水難よけの守護神とされている。

現在のお堂は、昭和42年２月に改築されたものである。建築は、新庄市沖の町の宮大工高橋四郎に依頼した。建築資金として沖の原墓地隣接地内、町内共有林の杉並木の売却金と町内民及び三光堰土地改良区その他よりの寄附金を充当したという。

改築を機に、御神体も新たに東京の水天宮より申し受け、昭和42年９月14日竣工式当日に遷座された。

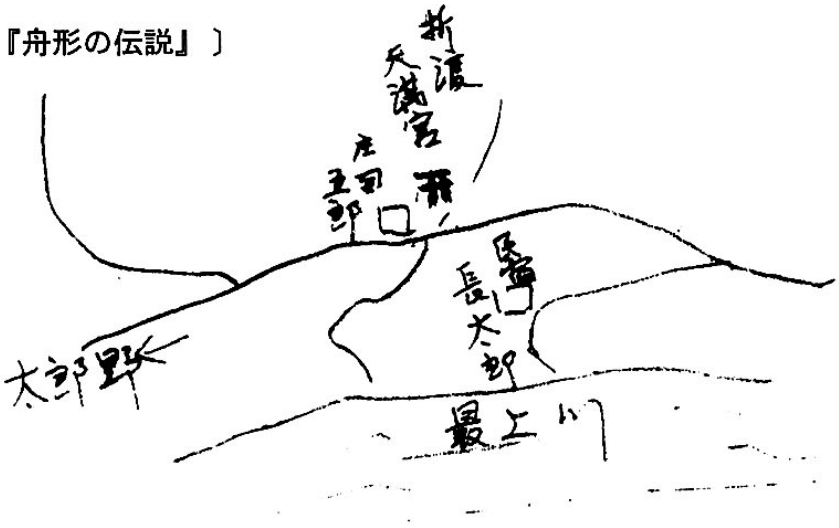

沖ノ原
高速
水木伝
水木
高速
R13
N

折 渡 の 天 満 宮

【所在地】　折渡

神像は彩色された座像であるが、左手は欠損し、彩色は所々剥落（ハクラク）している。「折渡天満宮由緒書」によれば、当社は菅原道真の一子秀最（ヒデモリ）の創建であるという。すなわち道真は、延喜元年（901）、九州太宰府に左遷され、同3年に薨（コウ）じたが、一子秀最は難を逃れて出羽の国（秋田、山形）へ逃れた。酒田より最上川を川船でのぼり、最上の猿羽根山の麓についた。ここから陸路になるので、しばしそこに宿を求めた。寝につき、丑の刻（午前2時）、夢枕に父道真が現れ、「我が姿を像に刻んで守り神とせよ」と告げた。翌日秀最は父の尊像を刻（キザ）み、最上川の流れとともに永久に伝えんと祠堂（シドウ）を建て、尊像を安置した。また当所を笈渡（オイワタリ）といったのは、古老の話によれば、昔源義経が笈で川を渡ったことから笈渡と云われたとか、信じ難い説であると書かれている。この由緒書は安永8年（1779）3月25日、羽州最上郡笈渡村笈立山大聖院が書いたものである。旧天満宮は最上川近くにあった。ここに弁慶が墨染の衣を掛けたと伝えられる「墨染めの桜」があったが、枯死して今はない。昭和31年に道路の上手の現在地に移転され祀られている。この近くに赤松の「笈掛の松」があったが、昭和38年に枯死し切り倒された。

〔『舟形町史資料集』No.1　『舟形の伝説』〕



平成７年８月９日撮影

天満神社由来

天満神社の祭神は、菅原道真で学問の神として篤く信仰されている。道真は、代々学者の家柄で幼少より才能を発揮し若くして文章博士に任ぜられた。宇多天皇の篤い信任を得て蔵人頭（くろうどのとう）・中納言（ちゅうなごん）・権大納言（ごんだいなごん）・右大臣（うだいじん）に任ぜられた。これを妬んだ藤原時平の讒言（ざんげん）で醍醐天皇は延喜元年正月（901）道真を大宰権帥（だざいのごんのそち）に左遷した。道真は同３年２月同地で没した。又道真の４人の男子も諸国に配流された。道真没後延長８年（930）内裏（だいり）へ落雷するなど異変が続いたので鎮魂のため北野天満宮に祀ったが、尚も異変が続くので正暦４年（993）道真に正一位左大臣を贈られた。当村佐藤家所蔵の安永８年（1779）笈立山（おいたてやま）大聖院の由緒書によれば、子の秀才が都より出羽の象潟の港に着き、そこより酒田へ出て川舟で最上川をのぼり猿羽根山の麓に宿った。夢枕に尊父の姿が現れ父は無罪であり不運を恨んではならないとこんこんと諭し消えた。翌日より父の尊像を刻み、最上川の流れと共に永久に伝えようと折渡の地に堂を建て尊像を安置し、後事を村人に頼み、栗原の里を経て配所いつくしの荘「岩井の陣屋」へ旅立ったという。神社は、以前佐藤氏側にあったが昭和31年当所へ移し祀った。境内南に義経伝説の笈掛の松という老松があったが枯れ昭和38年伐り倒されたことが惜しまれる。由緒を後世に伝えるべく略記す

平成11年　月吉日

撰文　溝　口　　仁

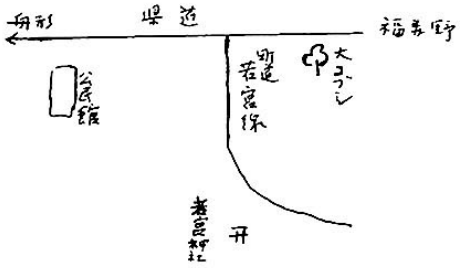
天満神社氏子一同

若宮八幡大神

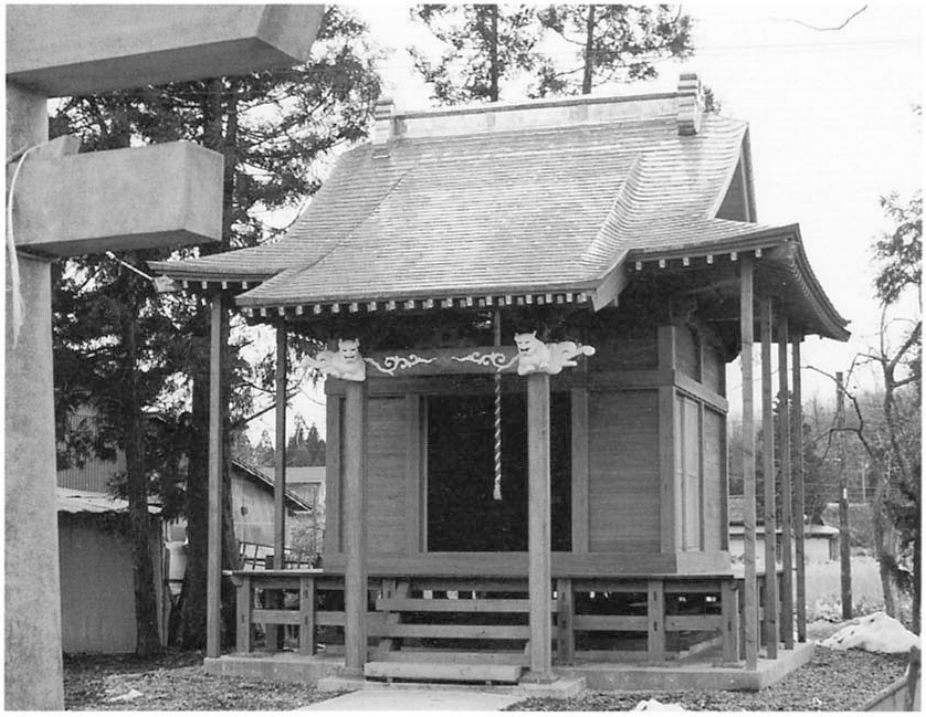
【所在地】　長者原

祭神は誉田別命（ホンダワケノミコト）と稲倉魂命が合祀されている。長者原西方村はづれ、河岸段丘上に日金（ヒガネ）村があったが、この地は桜堰によって、長者原と分断されている。『新庄領村鑑』にも長者原枝郷日金村が出ている。原八軒といって八軒が居住していたが、いつの頃か、長者原へ移住し、村は消滅した。この東方に中村がある。中村西南端に字若宮という地名がある。当初はここに若宮八幡神社が祀られていた。明治４年の富田不動院文書には、若宮神社創建不明と記されているから、かなり古い時代に建てられたものと思われる。

明治20年の棟札に、「明治廿年亥閏四月朔日　奉再建山形県羽国最上郡長者原村々社若宮八幡神社一宇星霜已ニ久シク雨蝕露敗シテ清宮既ニ廃シ礼典有　闕ケルコト故ニ今葺修シテ輝ケリ其旧儀焉、冀フハ神明垂レタマイテ感応四海艾安部内康楽風雨順序粱穀豊登ス矣神宮敬白、祭主義高豊美藤原慶眞」と書かれている。神社は学校敷地側にあったので、戦後連合軍最高指令官マッカーサー元帥の指令により、湯殿山、秋葉山の石碑は倒され、更に若宮神社は神明宮境内地へ遷宮された。昭和29年、学校統合により、昭和33年、再度現在地へ移し祀られた。その後、堂舎は腐蝕はげしく、平成３年再建された。祭礼は８月19．20日である。



平成７年７月撮影

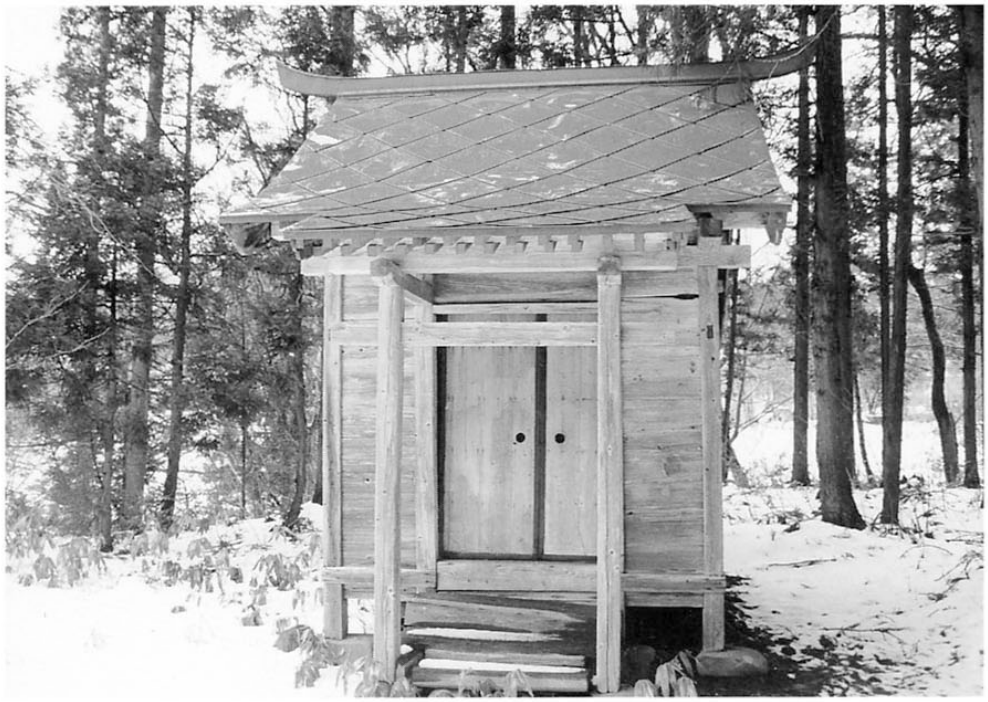


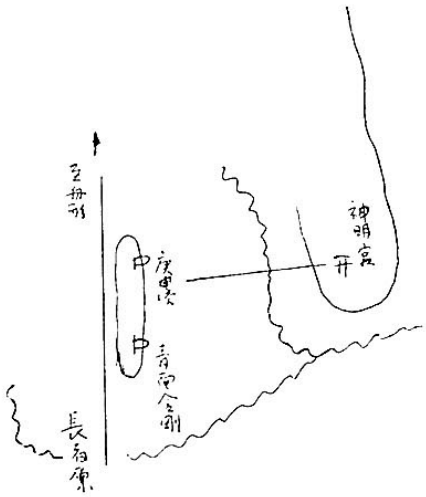
平成３年12月23日落慶し、御神体は平成４年８月９日新宮へ遷座する

長者原の神明神社

【所在地】　長者原沢口

長者原上の出崎と呼ばれる、河岸段丘が張り出した平坦な地に祀られている。神明社は相馬家の氏神である。昔、この付近を清水街道が通っていた。これより西方約100m位の所に、今では知る人も少ないが、籠(カゴ)かきが休んだといわれる籠立という処がある。清水もある。享保14年（1729)、当時80余才の古老２人から聞き書したという不動院の「神明縁起由緒書」（折渡佐藤欣一所蔵）によれば、福島の相馬から移住してきた相馬惣助という人がいた。惣助には姉のおたよと妹のおきさという娘がいた。惣助は体が不自由になり、姉を舟形へ売ってしまった。その後、妹のおきさに甚吉という婿をとり、生活が楽になった。元応２年（1319)、おきさが姉を尋ねて神明様を背負って、旅立った。３年後、姉は余目の押切弥惣次という人のところで働いていることがわかり、探しあてた。そのころ、甚吉の家に豊後国の浪人作右エ門というものが止宿して行商をしていた。この話を作右エ門に伝え、身代金を都合して姉を連れ戻し、姉を作右衛門にめあわせた。作右エ門は、中村に居を構え、豊岡と名乗った。その後、村は豊岡と相馬の両氏によって栄えたという。相馬家子孫の大工門兵エなる者が現在地に社を建て、11月16日を縁日とし、一族で祭礼を営むようにした。現在の碑は大正９年１月７日の建立であるが、御神体は盗難にあっていまはないと云われる。



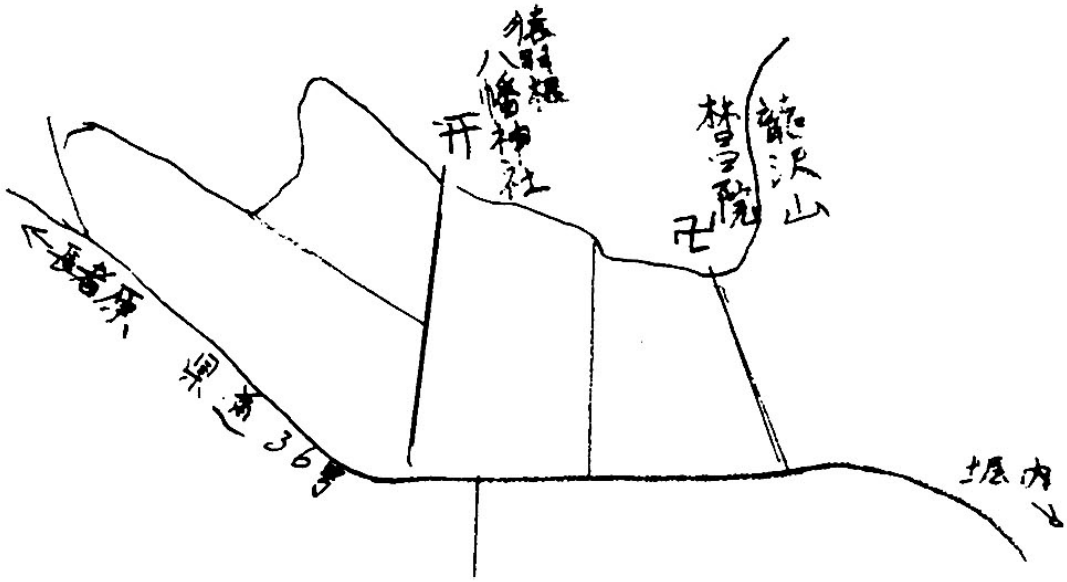


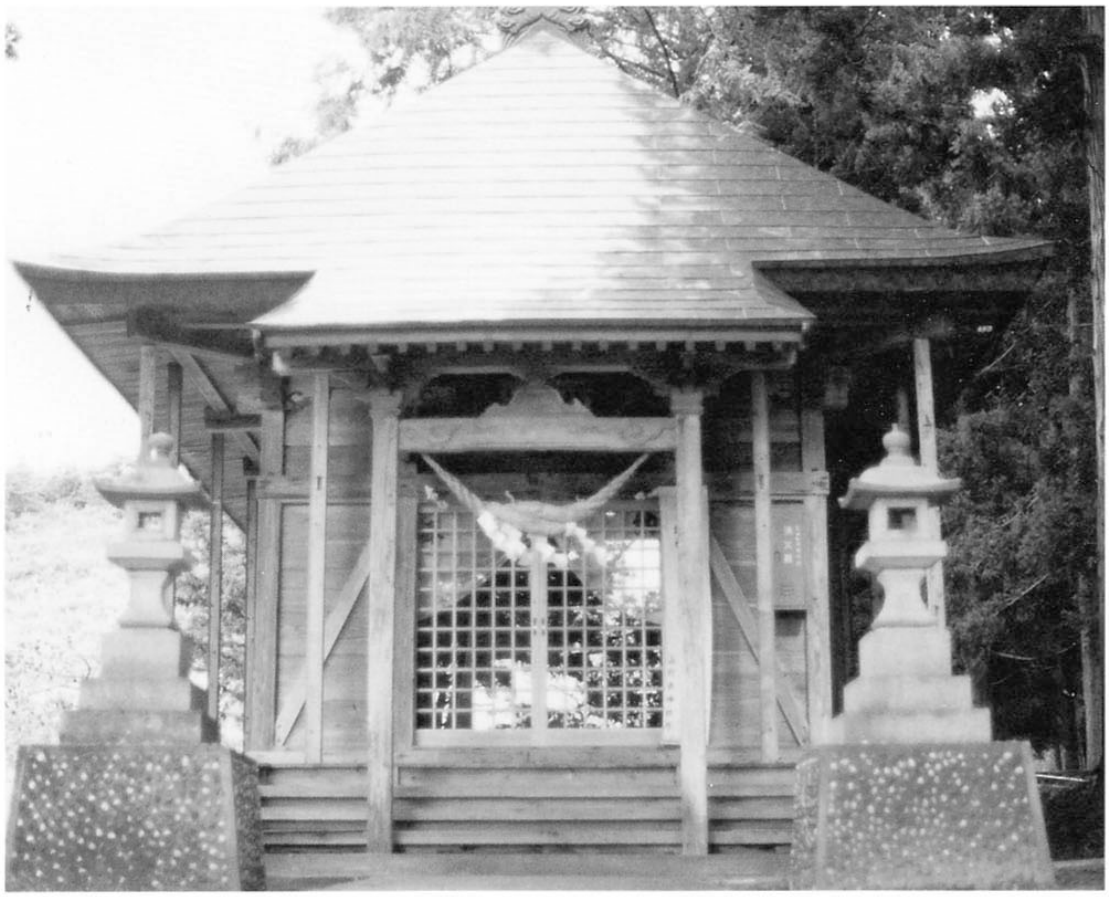
平成７年３月29日撮影

猿羽根八幡神社

【所在地】　富田

延文５庚子年（1360）８月１日、源次郎義高が当地の轟に入部し、貞治元年（1362）、同所に要害を構え、新山大明神、正八幡宮を氏神として奉祀した。後に地形が不利なので、新楯を猿羽根楯に移した。氏神もここに移し、別当永教、敬慶親子にこれを護らせた。御神体は行基作と伝えられ、大きさ５寸程の座像である。何か凶変が起きるときは、白馬が現れ、社の外に出て畑の麦を食ったというので、それより毎年境内に麦を植えることにしたという。猿羽根家９代城主義舜（ヨシズミ）は山形最上氏に従わず対立したが、天正17年（1589）６月17日長瀞に於いて切腹、猿羽根家は断絶した。以後山形の下城となり、猿羽根家々老安食治部が肝煎（キモイリ）となり、小田右衛門、氏家尾張守の知行地となった。猿羽根家断絶後、元和年間（1615～1623）、５代別当長慶が現在地に遷宮した。７代宥清が社を再興し、８代永慶が、元禄11年４月（1698）、社殿を造立した。八幡神社は、猿羽根家の子孫が修験者（日光院、不動院）となって代々守護してきたが、明治になり、落飾して義高と称した（『新庄最上神社誌』）。祭神は応神天皇、例祭日は８月15日。





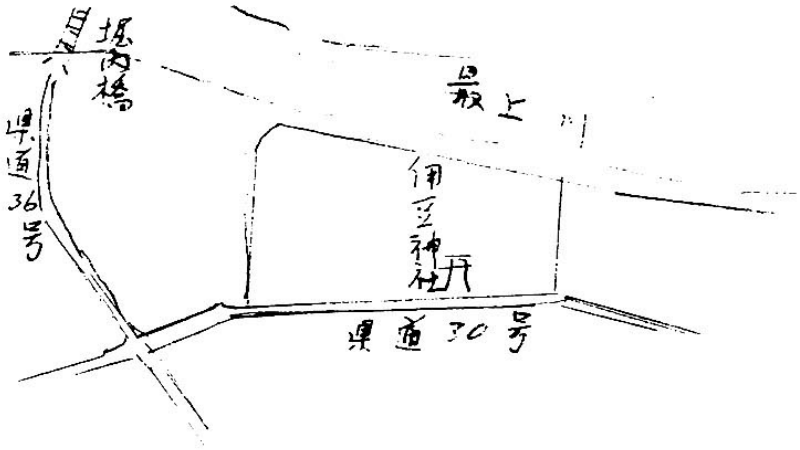
平成７年８月11日撮影

堀内の伊豆神社

【所在地】　堀内

延文５年（1360)、源義高が猿羽根楯を築城したが、その長男太郎義満は永和２丙辰年（1376）正月11日跡目を継ぎ後、義高は堀内手倉森に隠居した。その時、守神伊豆能売大神を城続きの字壺（ツボ）ケ窪（クボ）に祀った。これに関する墨付もあったが、宝暦７年（1757）７月11日、最上、小国両川の洪水と山崩れのため本殿は水没した。その後、宝暦７年に、宮を再建したが再び洪水にあい、社（ヤシロ）も境内地も土砂に埋まってしまった。やむを得ず、宝暦９年（1759）３月14日、現在地に再々建した。当時の庄屋は加藤門兵エ、大工運助、別当石井山両徳院真慶であった。御神体はもともと源義満より５代前の城主源宮内少輔泰氏の守神として天下泰平、武運長久を祈願したものであると記録されている。例大祭日は８月17日である『新庄最上神社誌』。舟形町史編集資料『松井秀房収集文書堀内村某書之内抜書』によれば、「宝暦７年５月25日、最上川に大水出る、堀内村家々に砂置上げ取除人足300人。同年７月11日昼八つ時（午後２時）堀内村火事家数18軒、外に寺并郷倉類焼。禅宗東光寺洲崎引越」とある。伊豆神社はこの２年後に現在地へ再建されたことになる。

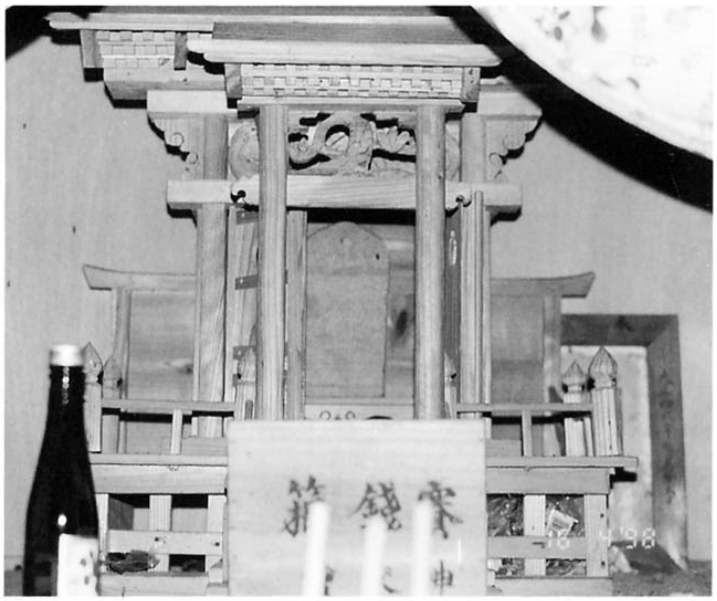
平成７年８月９日撮影

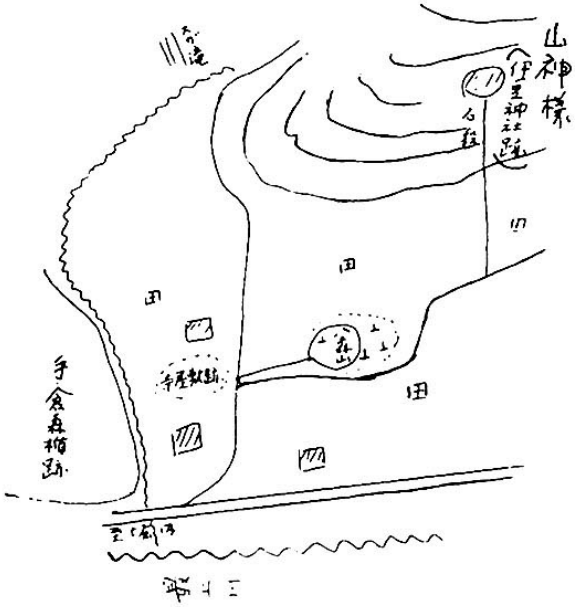


本堀内の山神様

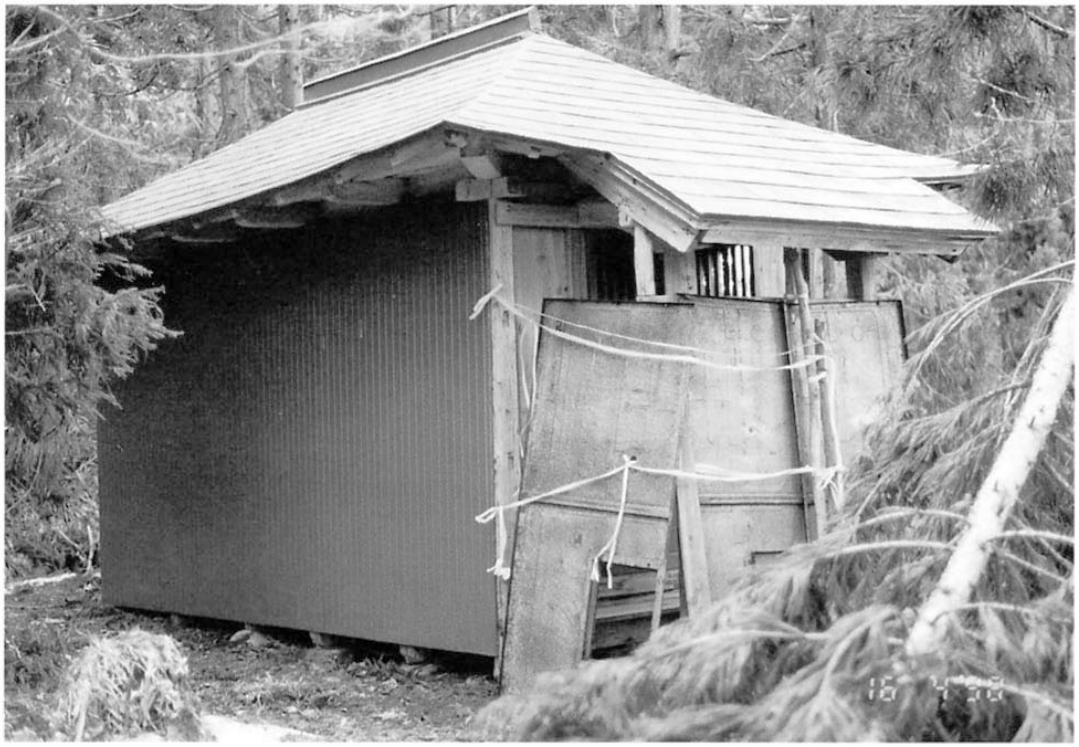
【所在地】　本堀内

本堀内の伊豆神社境内跡地に現在山神が祀られている。宝暦７年（1757）５月、洪水により、村の家屋が流され、加えて裏手の黒森山が崩れ、その上、同年７月火災によって大半の人家が類焼した。このため、舟番所始め人家32軒のうち26軒が現在の堀内に移住した。東光寺・伊豆神社も移転した。東光寺跡地は現在田になっているが、伊豆神社境内跡地は、南側の山の中腹にある。因（チナ）みに畑を掘り返してみたら、約60㎝下から土台石と思われる石が数多く出土したという。これは洪水により埋没したものであろう。





平成10年４月16日撮影



洲崎の荒神様

【所在地】　洲崎

『新庄領村鑑』には地神社と記されている。昭和２年の『堀内村勢要覧』によると「地神社は字洲崎の南方高地にあり。祭神を波邇山昆女命並荒神社の斎火産霊命、奥津比古命、奥津比売命とす」とある。また、「明治10年３月24日存置の許可を得て爾来同部落の氏神として崇拝して来たるものにして…」とあるので、荒神社は地神社と荒神社を合祀した社であろう。それを村の人々は荒神様の名でよび、その地を荒神台とよんでいるようである。

創立は寛文４年（1664)、別当は富樫七右エ門「大祭は７月７日之を行う」と記されている。

位置図は東光寺の頁参照

実栗屋の熊野神社

【所在地】　実栗屋熊野神社境内

実栗屋の南、真木野へ通じる道の小高い山をならして祀られている。以前は村の東方毒沢街道に祀られていた。祭神は伊邪那岐命（イザナギノミコト）で生産を司る神、五穀豊穣（ゴコクホウジョウ）、家内安全の神として厚く信仰された。延享３年（1746）に、描かれた「最上川川筋絵図」に、絹縫村、たてこ村、みくりや村の３ケ村に熊野堂が描かれている。このことからみても当社はかなり古いものと考えられる。実栗屋一帯は、地滑り地帯で、現在全戸立子に移住した。これによって、熊野神社も昭和53年４月吉日に同所へ遷宮された。熊野神を中心に左に地蔵堂、右に山神社が祀られている。

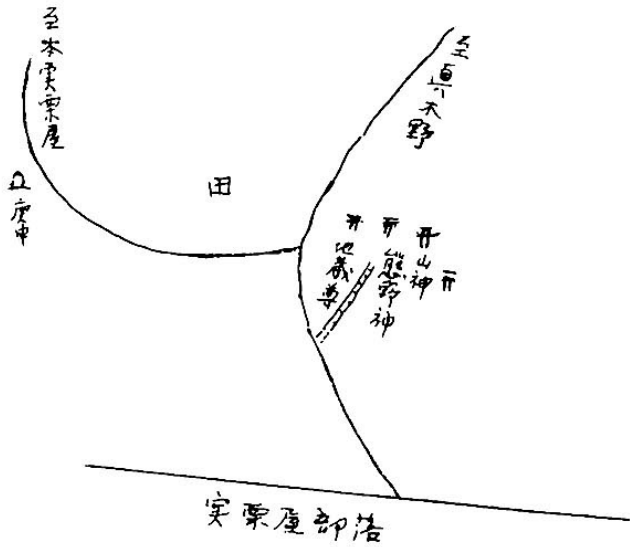
位置図は、実栗屋の山神の頁参照

平成７年８月10日撮影

実栗屋の山神様

【所在地】　実栗屋

実栗屋　熊野神社境内(ケイダイ)に祀(マツ)ってある。地形が高く盛り上がった所、そこには神霊が篭(コモ)る聖地であるとして、原始時代から崇拝の対象となってきた。山は人々の食料となる鳥獣や草木の実を豊富にもたらし、また水の源であり、人間生活を維持する母胎(ボタイ)であった。農耕社会になってからも変わりがなかった。その山を支配するのは山神であるという観念から山神信仰が始まった。祭神は大山祇命(オオヤマズミノミコト)である。山神は実栗屋村が立子地内に移ってから、熊野神社、地蔵尊と共にこの地に遷座(センザ)されたものである。

〔山形の石碑石仏、新庄最上神社誌〕

平成７年８月10日撮影